

教科観

目次

要約	2
第1章 サンプルのプロフィール	7
1. 学業成績の自己評価	7
2. 教科に対する評価	9
第2章 数学	11
1. 数学の好き嫌い	11
2. 数学という教科をどうとらえているか	16
3. 数学への要望	19
4. 塾と学校の数学の授業	22
第3章 英語	24
1. 英語の好き嫌い	24
2. 英語の授業が楽しいとき	27
3. 英語を学ぶことに対してどのように思っているか	30
4. 塾と学校の英語	32
5. どんな英語の授業がいいか	34
第4章 社会科	36
1. 好き嫌いの分かれ目は中1	36
2. 好きな分野は「歴史的分野」	39
3. 中学生は社会科を大切に思っている	42
4. 教師は生徒の要望に応じた授業を	44
第5章 理科	47
1. 理科嫌いは中学1年から始まる	47
2. 理科は実験・観察があるから楽しい	50
3. 生徒の望む理科授業	51
4. 授業中の様子	52
5. 理科の学習効果	53
6. 理数離れをめぐって	54
7. まとめに代えて	56
第6章 技術・家庭科	57
1. 教科の好き嫌い	57
2. 教科イメージ	61
3. 教科の中にある性差をめぐって	65
第7章 保健体育	70
1. 保健体育の好き嫌い	70
2. 教科イメージと要望	76
資料 調査票見本および集計結果	81

*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。



『モノグラフ・中学生の世界』Vol.48

調査レポート

教科観

〔監 修〕 深谷昌志 (静岡大学教授)

〔執筆分担〕

- 第1章 深谷昌志 (静岡大学教授)
 - 第2章 亀沢信一 (東京都稲城市立稲城第五中学校教諭)
 - 第3章 小沢紘子 (東京都練馬区立開進第四中学校教諭)
 - 第4章 長嶋安男 (石神井服飾専門学校教頭)
 - 第5章 伊藤澄生 (東京都練馬区立開進第二中学校教諭)
 - 第6章 三枝恵子 (埼玉県立小川高等学校教諭)
 - 鈴木秀男 (東京都練馬区立大泉第二中学校教諭)
 - 第7章 横田明宏 (東京都秋川市立東中学校教諭)
-

要 約

第1章 サンプルのプロフィール

- ① 苦手な教科は、男子は1位が英語、2位数学、女子は1位数学、2位が社会科である（p.10 表1-2）。
- ② 男子、女子ともに成績がよいとうれしい教科は、1位数学、2位英語である（p.10 表1-2）。

第2章 数学

- ① 数学を嫌いな生徒が多いが、その理由は「むずかしくてわかりにくい教科なのに、自分がよく復習していないから」と考えている（p.14 図2-4）。しかし、約7割の生徒が、まだ「これから一生懸命勉強したら得意になれる」と考えている（p.15 図2-5）。
- ② 数学は、高校や大学受験のための教科であり、その成績のよさがこれからの進路に大きな影響を与えていると思っっている（p.17 図2-7）。
- ③ 授業で「ゆっくり教えてほしい」と思っっている生徒は多いが、成績が下位の生徒ほど、その思いは強い（p.19 図2-8、表2-2）。
- ④ 学校の授業より塾の授業の方に、いろいろ

りな点で魅力を感じている（p.23 図2-9）。

第3章 英語

- ① 英語は、男子に比べて女子の方が好きな生徒が多い（p.25 図3-1）。
- ② 学年が上がるにしたがって、英語嫌いの生徒がふえてくる（p.26 図3-2）。
- ③ 英語の授業が一番楽しいのは、「教科書やプリントの問題が解けたとき」、次いで「外国人の先生の授業を受けているとき」（p.29 表3-3）。
- ④ 英語を学ぶのは「高校受験に役立つから」がトップ（p.30 図3-5）。
- ⑤ 「外国人の話を聞き取れるようになりたい」と思っている女子は非常に多い（85.4%）（p.31 図3-6）。
- ⑥ 塾の先生や家庭教師に習っている生徒は全体の80%近い（p.32 表3-5）。
- ⑦ 「授業はもっとゆっくり教えてほしい」と思っている（p.34 図3-8）。
- ⑧ 成績上位者と下位者が能力別授業を望んでいる（p.35 図3-9）。

第4章 社会科

- ① 社会科は、まあ好きな教科の1つである (p. 37 図4-1)。
- ② 好き嫌いの分かれ目は中学1年生 (p. 38 表4-2、表4-3)。
- ③ 中学生は歴史好きである。それは、マスメディアの影響であろうか。歴史的人物が生き生きと学習の中に入ってくるようになってきた (p. 46 表4-6)。
- ④ 進学希望者ほど社会科のうちで、特に歴史的分野が好き (p. 40 表4-4、図4-3)。
- ⑤ 社会科は、単なる実利的な勉強というより、基礎的な知識の学習ととらえられている (p. 42 表4-5)。
- ⑥ 教科指導の中で、何といても必要なのは「おもしろさ、わかりやすさ」である。教科書も大切だが、体全体を動かして学習させるテクニックを身につけさせたい (p. 44 図4-4)。

第5章 理科

- ① 男女別の「理科の好き嫌い」の結果をみると、小学校時代は理科が好きだった者が

中学入学後減っていることがわかる (p. 49 図5-1)。

- ② 理科に対する生徒の考え方は、「実験や観察があるので楽しい教科である」(75.6%) ととらえている反面、「学習内容が多すぎて、頭の中が混乱してしまう」(72.1%) と思っている (p. 50 表5-1)。
- ③ 中学生の望む理科授業は「おもしろい話や脱線を多く取り入れた授業」(79.2%)、「講義中心でなく、実験を中心にした授業」(73.3%)、「教科書は最後まで終わらなくてよいから、わかりやすい授業」(71.0%) である (p. 51 図5-2)。
- ④ 生徒が理科の授業中考えていることは、「授業はつまらないけれど、実験は楽しい」(58.8%) である (p. 52 図5-3)。
- ⑤ 理科の学習効果としては、「環境問題の大切さがわかった」(76.3%) ことである (p. 53 図5-4)。
- ⑥ 表5-2 (p. 54) から、理数離れが進んでいることがわかる。

第6章 技術・家庭科

- ① 技術・家庭科を好きな教科としている生徒は約75%。好きな学習内容は「木材を

使って作品を作る」「ラジオやインターホンなどを作る」「調理実習をする」など、実習を中心に物作りをする授業である(p. 58 図6-1、図6-2)。

- ② 教科イメージは、「実習が多く楽しい」「コンピュータなど最新の技術を勉強するのは楽しい」「将来の生活に役立つ」など、実習中心の生活に密着した楽しい教科として認識している。

また、「技術・家庭科より英語や数学をやってほしい」と思う割合は11.1%と予想外に低い。「息抜きできる教科」として、それなりの存在があるようである (p. 61 図6-3)。

- ③ 「木材加工」「電気」領域は男子、「食物」領域は女子が「好き」と答える割合が高い。教科意識では「コンピュータなど最新の技術を勉強するのは楽しい」のは男子、女子は「将来の生活に役立つ、身のまわりのことを自分でする時代なので技術・家庭科は大切、毎日の生活に役立つ勉強をしている」と思う割合が高い。

勉強して役立つことでは、男子は木製品、電気製品、機械の部品に関する知識理解、女子は食事が作れ、ボタンつけができ、食品の安全や栄養について考えるようになり、また洋服の材質がわかるなど、比較的身近な日常生活について有用感を持っている。

これらの項目で、男女差は顕著である (p. 66 図6-5~7)。

- ④ 男女共修や基礎基本の重視という観点のもとに、新しい目標に向かって歩み始めている。しかし、男女差が大きく残る現状で学習内容に興味・関心を持たせ、授業を展開することのむずかしさや、「息抜きできる時間」としての存在など、課題は多い。

第7章 保健体育

- ① 中学生の6割近くが、保健体育が「とても・わりと好き」と答えている。男子では約3分の2の生徒がそう答えている。また全体の3分の2の生徒が、外に出て「よく・ときどき遊ぶ」と答えた (p. 71 表7-1、表7-3)。

- ② 保健体育が嫌いな理由の第1位は男女共「不得意な種目が多いから」であった。「競争するのがいやだから」「運動が嫌いだから」「疲れるから」等が理由の上位である (p. 74 表7-5)。

- ③ 保健体育の授業に対する要望から、中学生は保健の授業より身体運動を望んでいることがわかる。また、競技種目の人気第1位はサッカーであった (p. 77 表7-6、表7-7)。

〔調査概要〕

対象●東京・神奈川・千葉の中学3年生
2,771人

時期●1993年9月～11月

方法●学校通しによる質問紙調査

サンプル構成 (人)

調査票	男子	女子	計
A(数・社・技家)	695	673	1,368
B(理・英・保体)	764	639	1,403
計	1,459	1,312	2,771

第1章 サンプルのプロフィール



1. 学業成績の自己評価

本モノグラフでは、生徒たちにとっての教科の勉強の意味を深めようとしている。そこで個々の教科についての検討を始める前に、今回の調査に協力してくれた生徒たちのプロフィールを紹介しておこう。

まず、生徒たちは、中学卒業後の進路を以下のように考えている。

	男子	女子	全体
中学卒で就職	2.2%	1.0%	1.6%
高校卒で就職	27.4	20.5	24.0
短大・専門学校	11.6	44.7	28.1
まあまあの4年制大学	42.2	25.6	33.9
一流の4年制大学	16.6	8.2	12.4

短大・専門学校を望む女子が半数に達しているのに対し、男子の中で4年制大学進学を考えている者が6割に近い。

これだけ性差の解消が進んでいるのに、こうしたデータをみると、性差の持つ意味の大

きさを改めて感じる。意識レベルではまだまだ性差が残っているのであろうか。

そして、生徒たちは自己評価について、以下のように答えている。

	男子	女子
健康に恵まれている	32.3% (62.4)	34.3% (67.0)
友だちが多い	16.0 (48.9)	12.0 (43.7)
やる気がある	8.1 (29.1)	8.0 (31.0)
意志が強い	7.9 (26.9)	6.9 (32.3)
先生に信頼されている	5.8 (15.6)	2.0 (11.7)

(「とても」の割合、カッコ内は「とても」+「わりと」の割合)

「健康に恵まれている」以外に、生徒たちが

自信を持っていないのに気づく。特に教師から信頼されていると思っている生徒は、「わりと」を含めても、1割台にとどまっている。

学業成績についての自己評価を表1-1に示した。全体として、「中位」と考えている生徒がほぼ4割を占める。

表1-1 学業成績の自己評価

(%)

		上	中の上	中	中の下	下
国 語	男子	6.2	20.9	41.1	22.6	9.2
	女子	9.6	26.8	43.7	14.0	5.9
社 会	男子	9.0	24.8	35.8	20.4	10.0
	女子	6.3	19.1	39.1	22.6	12.9
数 学	男子	8.7	24.4	31.1	22.4	13.4
	女子	5.9	19.4	34.5	23.0	17.2
理 科	男子	8.3	26.1	35.1	22.3	8.2
	女子	5.1	19.3	39.3	24.8	11.5
英 語	男子	9.2	21.0	30.7	22.3	16.8
	女子	10.1	23.2	34.3	20.2	12.2
音 楽	男子	5.2	13.7	40.9	27.1	13.1
	女子	14.1	29.0	40.6	10.5	5.8
美 術	男子	5.5	17.5	42.7	25.2	9.1
	女子	11.2	26.4	44.2	12.5	5.7
技術・家庭	男子	6.3	21.5	44.8	19.8	7.6
	女子	7.1	21.6	46.3	17.5	7.5
保健体育	男子	9.2	24.1	41.0	18.6	7.1
	女子	8.0	19.9	40.7	20.0	11.4

そうした中で性差に着目すると、以下のよ
うに教科によって、男女差が目につく。

1. 女子の方が多い 女子 男子
- ①音楽 43.1% > 18.9%
 - ②美術 37.6 > 23.0
 - ③国語 36.4 > 27.1
2. 差が少ない
- ①英語 33.3 > 30.2
 - ②技家 28.7 > 27.8
3. 男子の方が多い
- ①保体 27.9 < 33.3

- ②社会 25.4 < 33.8
- ③数学 25.3 < 33.1
- ④理科 24.4 < 34.4

(「上」+「中の上」の占める割合)

本来、女子の方が数学は苦手、あるいは、
国語は不得意ということはないはずなのに、
中学生くらいになると、女子=国語(文系)、
男子=数学(理系)という感覚が定着してい
るのがわかる。正直に言って、もう少し、性
差が縮小されてもよいのと思う。

2. 教科に対する評価

それでは、生徒たちはどういう気持ちで学
校へ通っているのでしょうか。

「楽しい」	男子	女子	全体
とても	11.2%	20.9%	16.0%
かなり	15.1	13.6	14.4
小計	26.3	34.5	30.4
「どちらとも」			
やや楽しい	21.7	21.8	21.7
ふつう	33.6	28.2	30.9
やや楽しくない	5.1	5.9	5.5
小計	60.4	55.9	58.1
「楽しくない」			
あまり	6.5	5.9	6.3
ぜんぜん	6.8	3.7	5.2
小計	13.3	9.6	11.5

「楽しい」と思っている生徒は3割くらい
だが、「楽しくない」と感じている生徒は1
割前後にとどまる。そして残りの6割くらい
は、楽しいとも楽しくないともいえないとい
う感じである。

教科についての評価は表1-2に詳しいが、
男女別にそれぞれ上位2つをあげると、以下
の通りとなる。

1. 得意な教科 男子 女子
- ①保体22.5% ①音楽19.1%
 - ②数学18.1 ②保体15.6
2. 苦手な教科
- ①英語27.9 ①数学34.2
 - ②数学22.1 ②社会17.5
3. 成績がよいとうれしい教科
- ①数学31.2 ①数学39.4
 - ②英語29.5 ②英語25.5
4. 将来役立つ教科
- ①英語33.2 ①英語41.0
 - ②国語17.3 ②技家17.0

詳しくみていくと興味深いデータだが、い
ずれにせよ、生徒たちの中で、苦手意識の強
いのが数学、しかも、よい成績をとれるとう
れしいのも数学となる。また英語も、将来役
立つし、よい成績をとりたいた教科だという評

価である。

なお、授業中の気持ちについて生徒たちに尋ねてみると、「ノートをしっかりとしている」生徒が、「いつも」で55.3%（男子50.7%、女子59.9%）。また「内職をぜんぜんしていない」生徒は55.0%（男子60.7%、女子49.2%）なので、まじめに授業を聞いている

のがわかる。しかし、「先生の話を中心に聞く」は、「わりと」が49.5%（男子46.3%、女子52.8%）、「先生に質問する」は「いつも」に「わりと」を含めても、10.0%（男子11.7%、女子7.3%）なので、熱心に授業に取り組むというより、まじめに話を聞いている感じなのであろう。

表1-2 教科に対する評価

(%)

		国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	技術・家庭	保健体育
一番得意な教科	男子	7.1	16.9	18.1	9.8	10.4	2.7	6.2	6.3	22.5
	女子	12.5	6.1	8.1	3.9	14.1	19.1	15.2	5.4	15.6
一番苦手な教科	男子	9.9	9.3	22.1	8.0	27.9	8.5	7.5	2.9	3.9
	女子	3.3	17.5	34.2	11.4	16.6	1.1	2.7	3.1	10.1
成績がよいと一番うれしい教科	男子	11.4	8.5	31.2	6.9	29.5	2.5	2.3	1.6	6.1
	女子	7.6	9.1	39.4	3.6	25.5	2.6	4.3	0.8	7.1
将来一番役に立つ教科	男子	17.3	11.9	15.4	2.1	33.2	1.3	1.4	10.3	7.1
	女子	14.8	6.4	8.3	2.4	41.0	3.1	4.3	17.0	2.7

第2章 数学



1. 数学の好き嫌い

「一番苦手な教科は？」と質問されて「数学」と答える人は多い。実際、本調査でも、一番苦手な教科として「数学」をあげた生徒が27.0%もいた（9教科の中で1位）が、その理由は何なのであろうか。

図2-1は、現在の数学の好き嫌いの様子をあらわしている。「とても・わりと好き」な生徒が36.6%に対して、「あまり・まったく好きでない」生徒は42.0%で、数学を「好き」な生徒よりも「嫌い」な生徒の方が上回っている。男女別でみると、男子は「とても・わりと好き（41.4%）」な生徒の方が「あまり・まったく好きでない（37.7%）」生徒を上回っているが、女子は逆になっている。女子の約半数の生徒が、数学という教科

を「あまり・まったく好きでない（46.4%）」と答えている。

それでは、今まではどうだったのであろうか。図2-2は、小学校の時から好き嫌いの推移をあらわしている。小学1～3年のころは、「とても・わりと好きだった（43.6%）」生徒が「あまり・まったく好きでなかった（33.2%）」生徒を上回っているが、小学4～6年になると、それが逆転している。中学になってからは、数学を「とても・わりと好き」な生徒は30.0%でその割合はあまり変わっていないが、「あまり・まったく好きでない」生徒の割合は着実に増えている。

さらに数学の成績との関係を図2-3でみると、現在成績が上位の生徒は、学年が進む

につれて、「好き」な割合が増えている。また、成績が中の上の生徒は、小学4～6年で「好き」な割合が一度減っているが、中学に

なつてからは増えている。成績が中の下、下位の生徒は、学年が進むにつれて「好き」な割合が減っている。算数、数学は積み重ねの

図2-1 現在数学が好きか

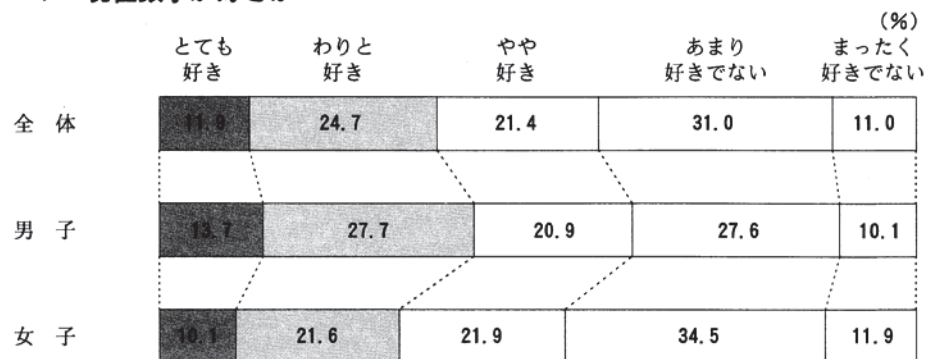
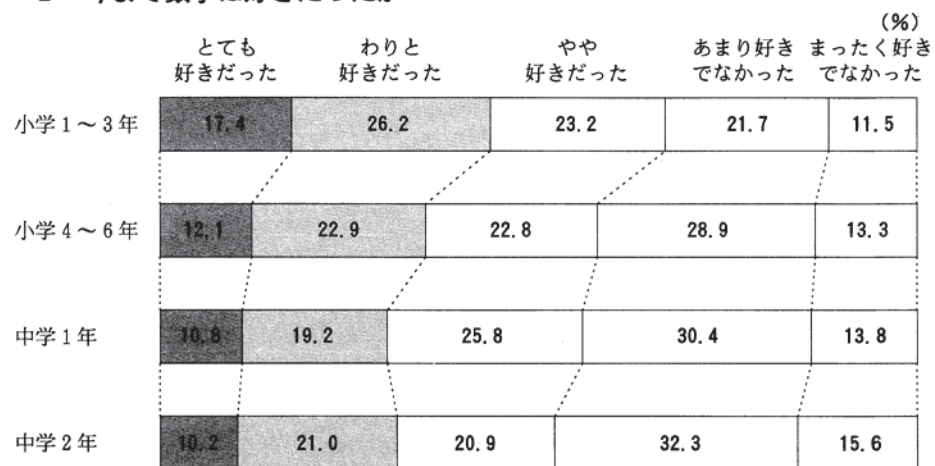


図2-2 今まで数学は好きだったか

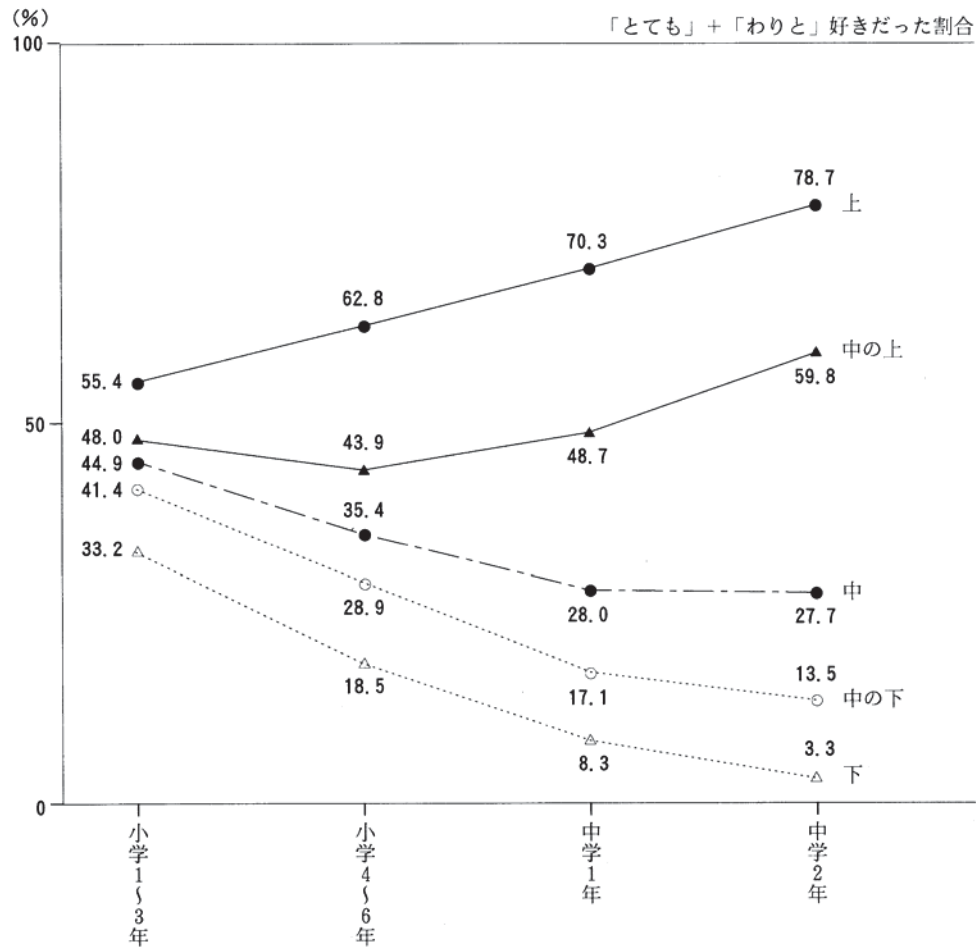


教科であるから、前の内容を理解できている生徒にとっては多少むずかしくなってもおもしろいが、一度嫌いになると、再び好きにな

るのはむずかしいのであろう。

このように数学という教科は好き嫌いがはっきりしていて、しかも嫌いな生徒の方が

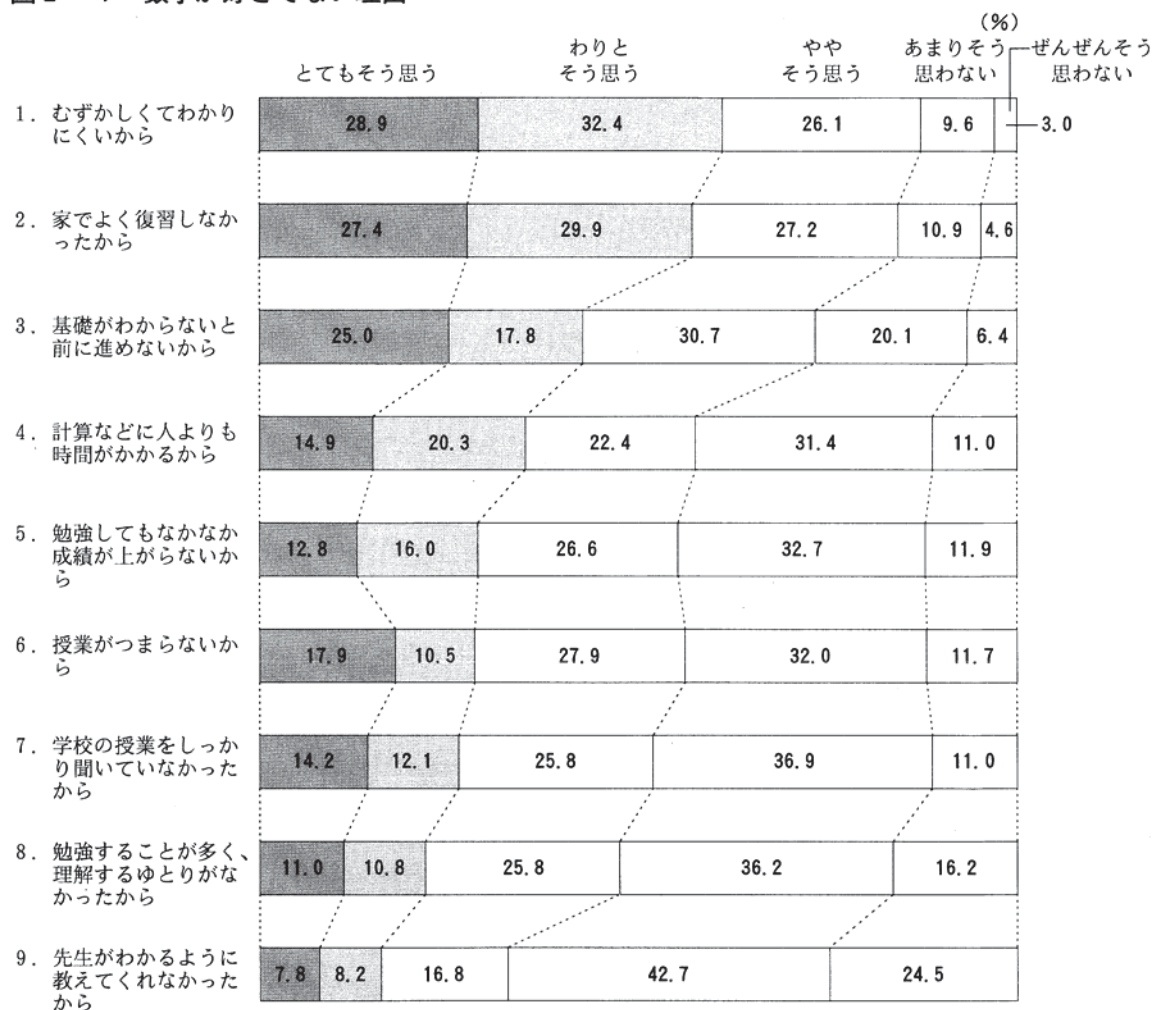
図 2-3 今まで数学は好きだったか × 数学の成績



多いが、その理由は何なのであろうか。数学が好きでない理由を図2-4でみると、「むずかしくてわかりにくいから」「基礎がわからないと前に進めないから」というように、教科の性質のせいになっている生徒が多い。そして、むずかしい教科だから本来ならたくさん勉強しなければならないのに、「家でよく復習しなかった」自分がいけないと考えている。「授業がつまらないから」とか「先生がわかるように教えてくれなかったから」などのように、授業の内容や先生のせいになっている生徒は意外に少ない。

ん勉強しなければならないのに、「家でよく復習しなかった」自分がいけないと考えている。「授業がつまらないから」とか「先生がわかるように教えてくれなかったから」などのように、授業の内容や先生のせいになっている生徒は意外に少ない。

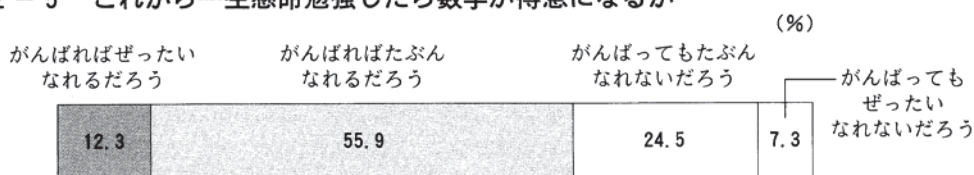
図2-4 数学が好きでない理由



しかし、むずかしくてわかりにくい教科なのに、約7割の生徒が「これから一生懸命勉強したら得意になれる」と考えている（図2-5）。男女、成績に関係なく、多くの生徒がそう考えているのは意外である。本調査で「成績がよいと一番うれしい教科」として、

38.7%の生徒が9教科の中から数学を選んだが、受験のことを考えると、数学ができるようになりたいし、まだまだこれからでも勉強すれば大丈夫と考えているのであろう。

図2-5 これから一生懸命勉強したら数学が得意になるか

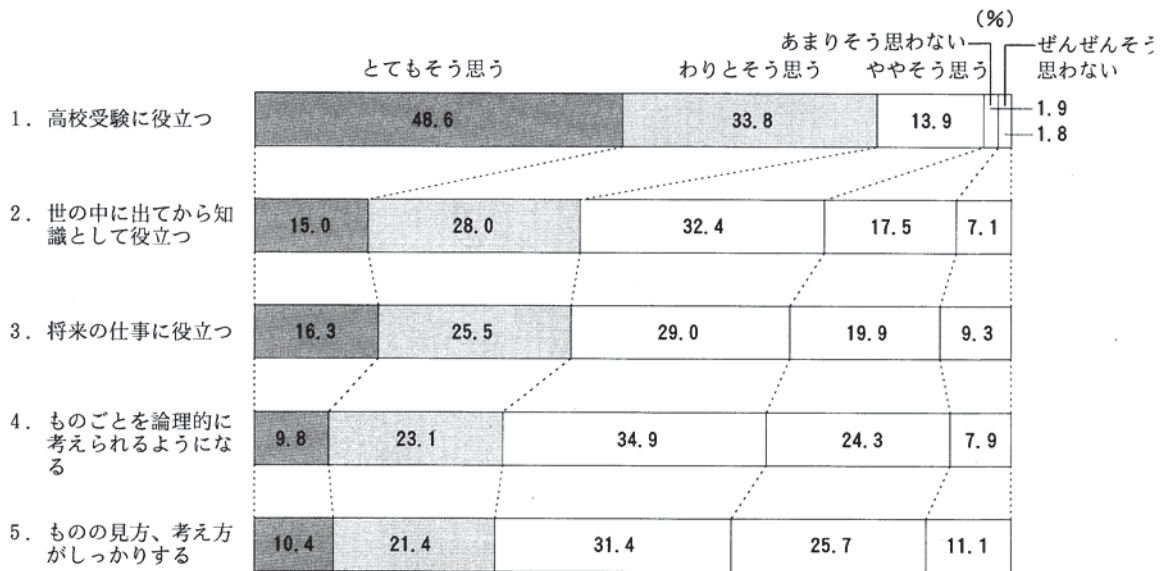


2. 数学という教科をどうとらえているか

数学はむずかしくてわかりにくい教科だから嫌いという生徒が多いが、数学を勉強することはどういう意味があると思っているのだろうか。

図2-6をみると、まず8割以上の生徒が数学は「高校受験に役立つ」教科だと思っている。そして「世の中に出てから知識として役立つ」「将来の仕事に役立つ」については、

図2-6 数学に対する考え方

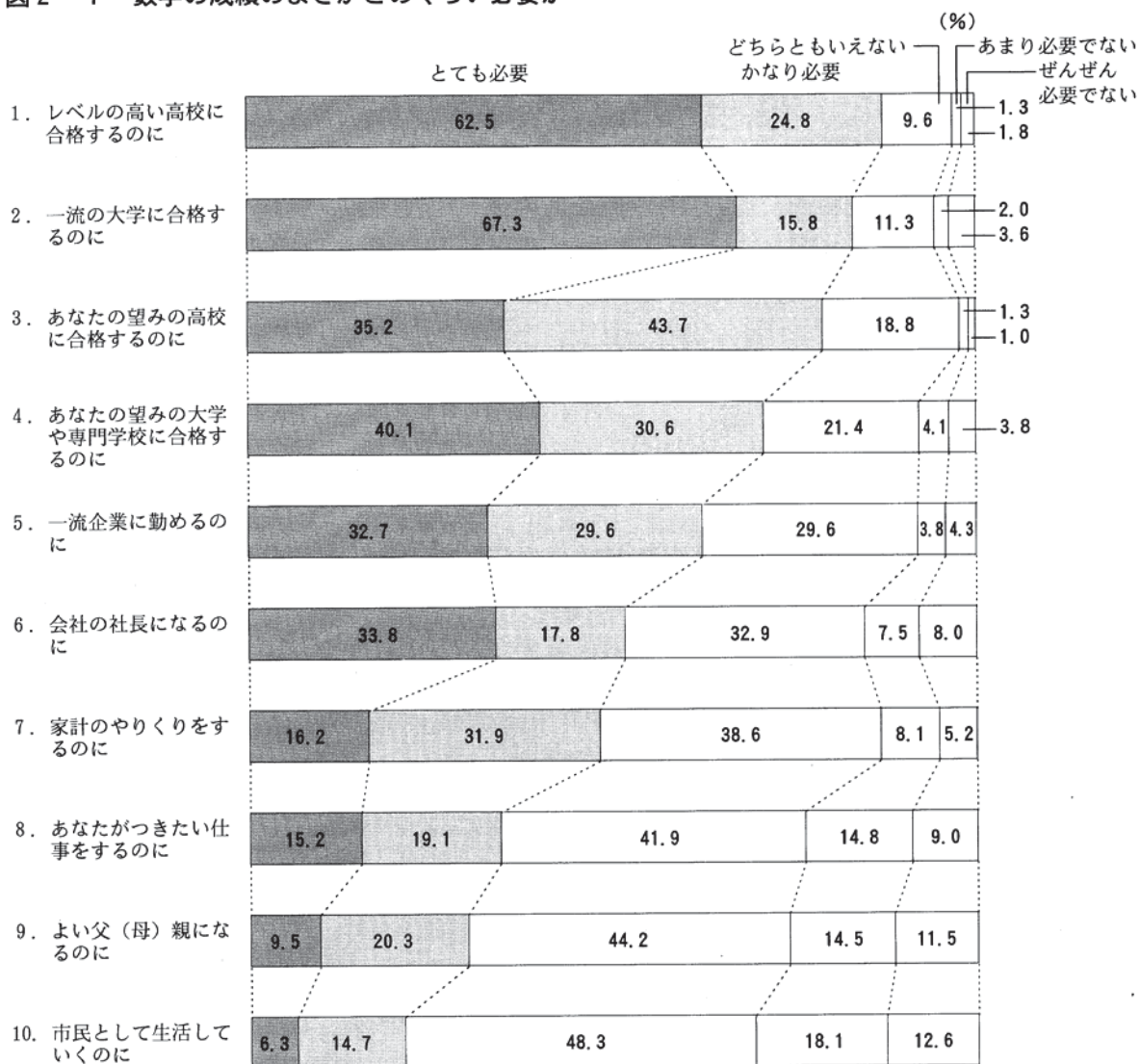


「とても・わりとそう思う」生徒が約4割いて、「あまり・ぜんぜんそう思わない」生徒を上回っている。しかし、数学を勉強することによって「ものごとを論理的に考えられるようになったり」、「ものの見方、考え方がしっかりする」とはあまり思っていない。以上のことから、とにかく数学は、まずは高校受験のために、そして、ひょっとしたら将来役に立つかもしれないという理由で勉強して

いることがわかる。

そのことは図2-7でもはっきりとあらわれている。約9割もの生徒が「レベルの高い高校に合格する」のに、また約8割の生徒が「自分の望みの高校に合格する」のに、数学の成績のよさが「とても・かなり必要」だと思っている。そして「一流の大学に合格する」「自分の望みの大学や専門学校に合格する」のにも必要だと思っている生徒がかなり

図2-7 数学の成績のよさがどのくらい必要か



多い。それに対して、「よい父（母）親になる」「市民として生活していく」のように、将来の通常の市民生活をおくるためには数学の成績は関係ないと考えている生徒が多いが、「どちらともいえない」と答えている割合も高い。

以上のように、数学は受験のための教科という認識が高いわけだが、表2-1で現在の数学の好き嫌いと希望の進路との関係を見る

と、数学が「とても・わりと好き」な生徒は「4年制の大学」まで行くつもりでいる生徒が多いが、「あまり・まったく好きでない」生徒は「高校卒で就職」か、「短大・専門学校」まで行くつもりである。このことから、数学の成績がこれからの受験や将来の進路に大きな影響を与えていると思う生徒が多いようである。

表2-1 現在数学は好きか × 希望進路

(%)

	中学卒で就職	高校卒で就職	短大・専門学校	まあまあの4年制大学	一流の4年制大学
とても好き	0.0	14.3	16.1	37.9	31.7
				69.6	
わりと好き	0.0	18.0	24.3	42.6	15.1
				57.7	
やや好き	0.7	25.6	29.8	34.9	9.0
				43.9	
あまり好きでない	1.9	35.0	31.4	25.7	6.0
				31.7	
まったく好きでない	6.8	37.8	29.7	20.3	5.4
				25.7	

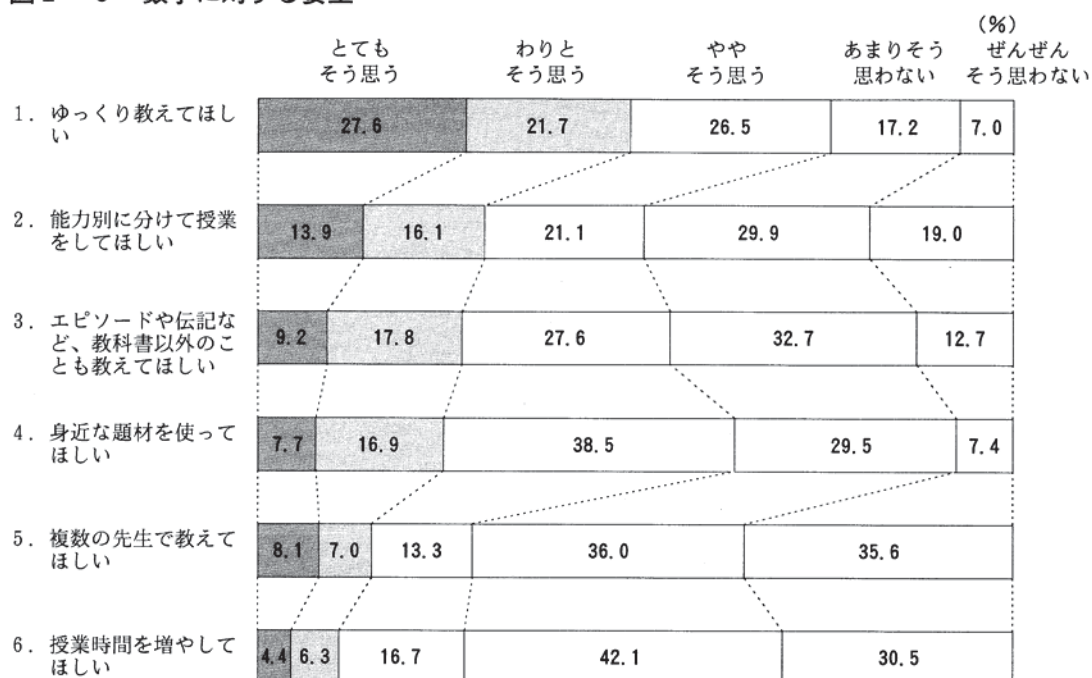
○は最大値

3. 数学への要望

生徒たちは、数学に対してどのような要望があるのだろうか。図2-8をみると、約半数の生徒が「ゆっくり教えてほしい」と思っ

ている。教える方もそのあたりはわかっているのだろうが、現在の授業時数では、どうしても教科書を消化するのが精一杯なのである

図2-8 数学に対する要望



う。ところが、生徒たちは「授業時間を増やしてほしい」とはぜんぜん思っていない。矛盾しているが、授業時数は増やさないで、しかもゆっくり教えてほしいのである。また「能力別に分けて授業をする」ことに対しては、どちらかというとな否定的であり、「複数の先生で教えてほしい」と「あまり・ぜんぜんそう思わない」生徒が71.6%もいる。最近チームティーチングを取り入れている学校も

増えてきているが、実際に経験していない生徒にとってはイメージがわからないのかもしれない。「エピソードや伝記など、教科書以外のことも教えてほしい」「身近な題材を使ってほしい」と思っている生徒もそれほど多くない。受験のための教科という意識が高いこととも関係がありそうである。

さて、「ゆっくり教えてほしい」と思っているのはどういう生徒たちなのであろうか。

表2-2 ゆっくり教えてほしい × 数学の成績

(%)

		とてもそう思う	わりとそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	ぜんぜんそう思わない
数学の成績	上	12.8	16.0	16.0	31.8	23.4
		28.8			55.2	
	中の上	20.7	17.8	27.9	25.7	7.9
		38.5			33.6	
	中	25.0	23.4	29.7	17.5	4.4
	48.4			21.9		
	中の下	35.1	27.9	25.0	9.1	2.9
		63.0			12.0	
	下	39.3	18.2	23.8	9.8	8.9
		57.5			18.7	

○は最大値

表2-2は数学の成績との関連をあらわしているが、当然のことながら成績が下位の生徒ほど「とても・わりとそう思う」割合が高く、中の下、下位の生徒の約6割はそう思っている。中の上の生徒さえ、「とても・わりとそう思う」割合が「あまり・ぜんぜんそう思わない」割合を上回っている。決して成績が上位の生徒のレベルにあわせて授業をやっているわけではないと思うので、これはやはり、

数学はむずかしいという認識があるせいであろう。

表2-3は「能力別に分けて授業をしてほしい」と思っている割合を数学の成績別にあらわしたものである。全体的にそう思っている割合は高くないが、その中でも成績が上位と下位の生徒が「とても・わりと」そう思っている。また、成績が中位以上の生徒の半数以上は「あまり・ぜんぜん」そう思っていない。

表2-3 能力別に分けて授業をしてほしい × 数学の成績

(%)

		とてもそう思う	わりとそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	ぜんぜんそう思わない
数学の成績	上	22.3	14.9	12.8	34.0	16.0
		37.2			50.0	
	中の上	10.5	15.1	15.5	35.5	23.4
		25.6			58.9	
	中	9.8	14.2	24.5	30.8	20.7
	24.0			51.5		
中の下	13.5	19.6	23.2	28.6	15.1	
	33.1			43.7		
下	24.4	16.0	21.6	21.6	16.4	
	40.4			38.0		

○は最大値

4. 塾と学校の数学の授業

最近塾の方が、学校よりも先の内容を勉強していることが多く、学校での授業がやりにくくなっている。どんなに導入などを工夫しても、生徒は結果を知っている、ぜんぜん興味を示さないのである。生徒たちは、

塾と学校の授業について、どのように思っているのだろうか。

まず、表2-4では「塾や家庭教師の先生に数学を教わっている」割合を数学の成績別にあらわしている。全体では72.9%の生徒が

表2-4 塾や家庭教師に数学を教わっているか × 数学の成績

(%)

		はい	いいえ
数学の成績	上	85.1	14.9
	中の上	82.2	17.8
	中	75.6	24.4
	中の下	70.1	29.9
	下	51.7	48.3
全体		72.9	27.1

表2-5 週に何回教わっているか

(%)

1回	2回	3回	4回	5回	6回
30.1	32.7	25.8	7.7	3.6	0.1
88.6					

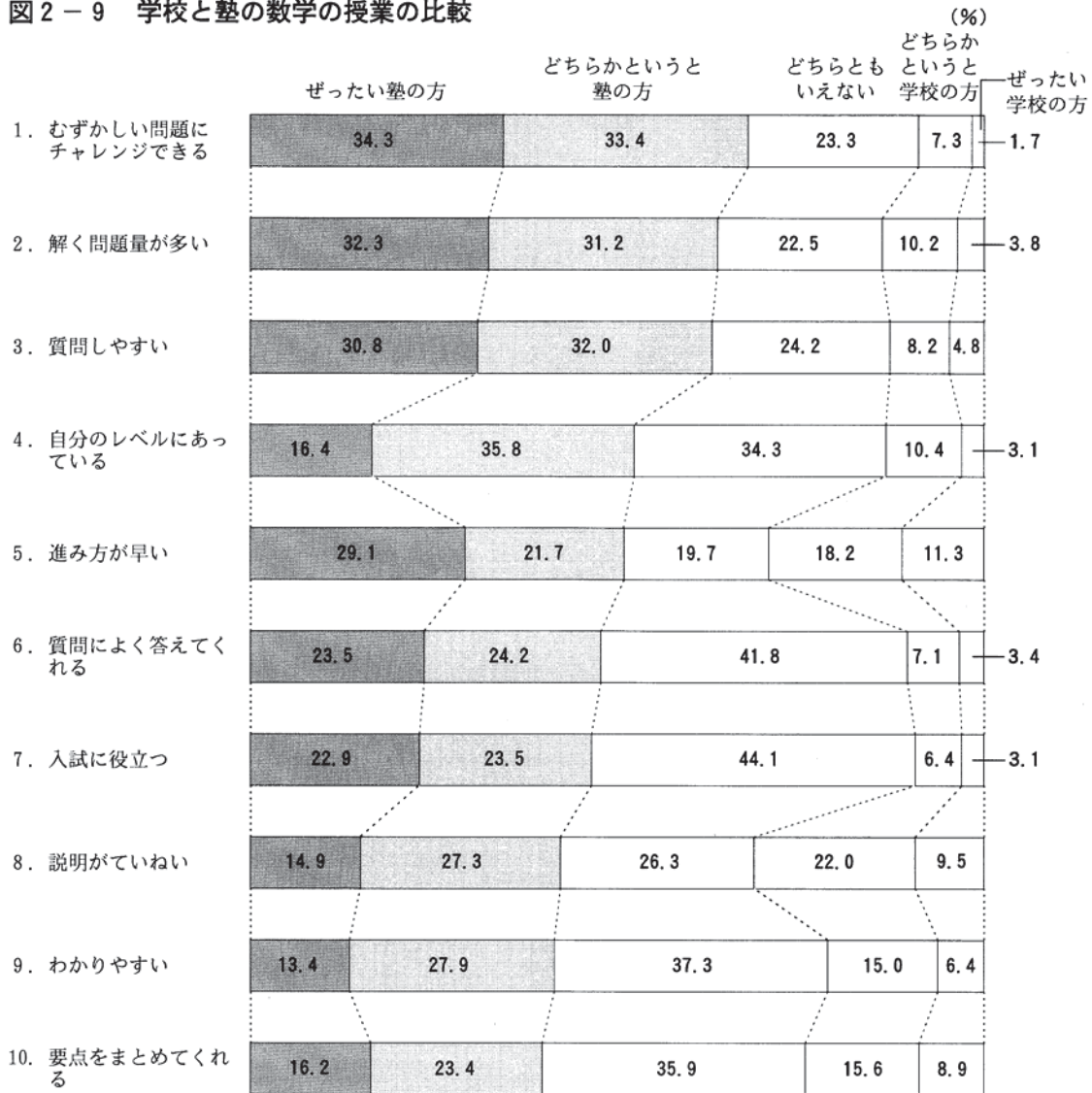
○は最大値

教わっているが、成績が上位の生徒ほど、その割合が高い。そして、そのうちのほとんどの生徒が週に1～3回教わっている（表2-5）。

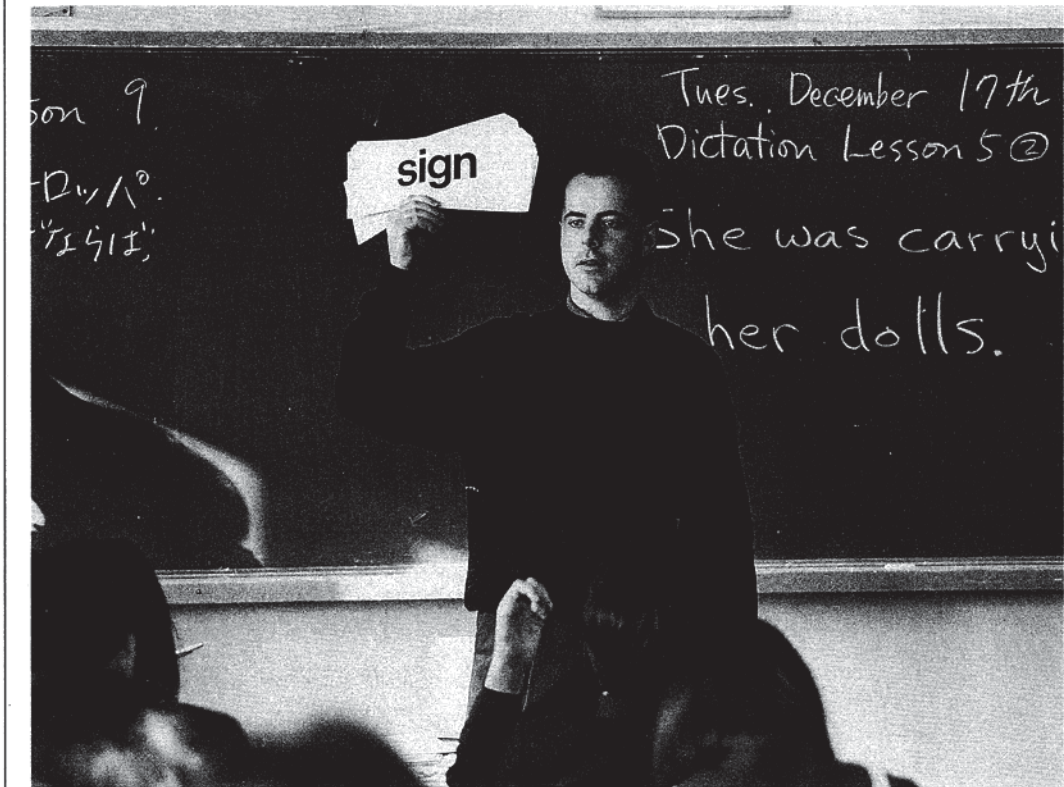
さて、塾と学校の授業の比較であるが、図2-9でわかるように、すべての項目で塾が学校を上回っている。その中でも特に、「むずかしい問題にチャレンジできる」「解く問題量が多い」「質問しやすい」「自分のレベルにあっている」「質問によく答えてくれる」

「入試に役立つ」などは、塾が上回っている割合が高い。一方、学校は「説明がていねい」「進み方が早い」「要点をまとめてくれる」「わかりやすい」という点ではそう思っている生徒が多いが、それでも塾にはかなわない。この結果をみる限り、生徒たちにとっては、塾の授業の方に魅力があるようである。時数や生徒のレベルなどいろいろと問題はあっても、学校の授業も、もっと工夫していく必要があると思われる。

図2-9 学校と塾の数学の授業の比較



第3章 英語



中学から始まった英語という教科について、中学生たちはどのように考えているのだろうか。調査項目にしたがって、中学生の英語に対する考えをみていこう。

1. 英語の好き嫌い

中学生は英語が好きなのだろうか。嫌いなのだろうか。

図3-1は英語の好き嫌いの程度を示している。全体では「とても好き」と「わりと好き」を合わせると38.2%になる。男女別にみると、男子が「とても好き」と「わりと好き」を合わせても33.1%にしかならないのに対して、女子の方は44.2%と男子を大きく上回っている。

さらに、男子の47.3%が「あまり・まったく好きでない」と答え、「好き」の33.1%をはるかに超えているところを見ると、英語と

いう教科は、女子には比較的好かれているが、男子にとってはあまり好ましい教科とはいえないということになるようだ。

男女に関しては、数学の好き嫌いとはちょうど逆転した形になる。暗記力を問われ、こつこつと努力を積み重ねていく必要のある英語という教科は、男子には苦手ということだろうか。男子をもひきつける授業のあり方を再考する必要がある。

では、進路希望別に英語の好き嫌いをみていくとどうなるだろうか。

表3-1によると、上級学校への入学希望

者になるにしたがって、「とても・わりと好き」の割合が増えている。「一流の4年制大学」への入学希望者の「とても好き」と「わりと好き」の合計は66.3%にも及ぶ。一方、「中学卒で就職」希望者の実に87.0%の生徒が「あまり・まったく好きでない」と答えている。「高校卒で就職」希望者は63.2%の生徒が好きではないようだ。これは他教科にはみられない特徴で、まだ英語の教科書を習いはじめて3年にも満たない生徒たちが、このような意識を持っているという現実を、英語教師はよく考えてみる必要がある。英語は受験に不可欠の教科といわれて久しいが、受験のための教科というのではなく、将来、国際的な社会を支えていくすべての人々に必要な教科という視点に立てば、もっと多くの生徒

に受け入れられる英語教育が求められているということがいえよう。

それでは、わずか数年前に習い始めた英語が、一体いつごろから嫌いになっていったのかをみてみよう。

図3-2は英語の好き嫌いの変化の様子を示している。「とても・わりと好きだった」と答えた生徒が1年生の1学期には52.2%と半数以上にのぼっているのに対して、2年生では34.8%と激減している。特に1年生の1学期から3学期にかけての、わずか数か月の間に15.5%もの生徒が好きから「やや好き」と「嫌い」に移行しているのが特徴的である。つまり1年生の間に、好き嫌いの傾向にはっきりとした分かれ目が出てくるということである。簡単な単語や文章、会話で始まったこ

図3-1 英語の好き嫌い

	とても好き	わりと好き	やや好き	あまり好きでない	まったく好きでない
全体	13.6	24.6	20.9	25.9	15.0
男子	11.3	21.8	19.6	27.8	19.5
女子	16.3	27.9	22.6	23.5	9.7

表3-1 英語の好き嫌い × 希望進路

	とても好き	わりと好き	やや好き	あまり好きでない	まったく好きでない
中学卒で就職	0.0	4.3	8.7	43.5	43.5
高校卒で就職	3.7	12.5	20.6	39.6	23.6
短大・専門学校	11.1	24.2	25.0	24.7	15.0
まあまあの4年制大学	14.9	29.6	20.8	24.2	10.5
一流の4年制大学	31.0	35.3	14.1	10.9	8.7

ろはわかりやすく、楽しむこともできたのだが、2学期から3学期と日を追ってむずかしくなり、やがて手に負えなくなるのであろう。学年当初は、かなりの人数をひきつけていた英語を、そのまま3年間魅力のある教科に維持していく力量を、教師は問われているといえよう。

では、好きであった英語が、嫌いになっていく理由は一体何だろうか。

図3-3は、英語が好きでない理由を示している。好きでないのは「家でよく復習しなかったから」という理由をあげている生徒が

最も多い(54.1%)。調査前は教師のせいだと感じている生徒が最も多いと思われたが、意外にも自分を振り返り反省している生徒が半数以上にのぼる。英語が好きになれないうえに、自分を責めている生徒のつらい気持ちが伝わってくるような結果である。「先生がわかるように教えてくれなかったから」という理由をあげた生徒は一番少なかったものの、「授業がつまらないから」という生徒は「とてもそう思う」と「わりとそう思う」を合計すると、43.4%にもなる。ここでも、英語教師の授業の工夫が求められている。

図3-2 英語の好き嫌いの変化

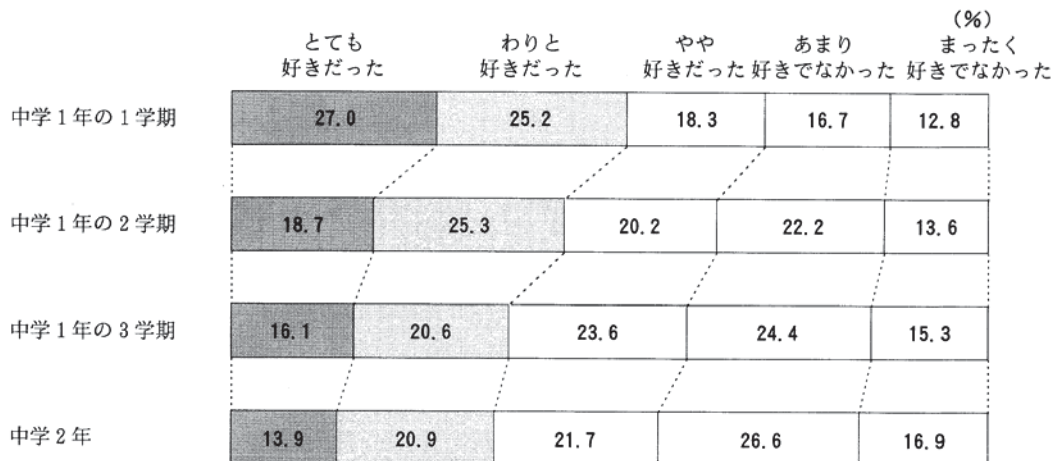
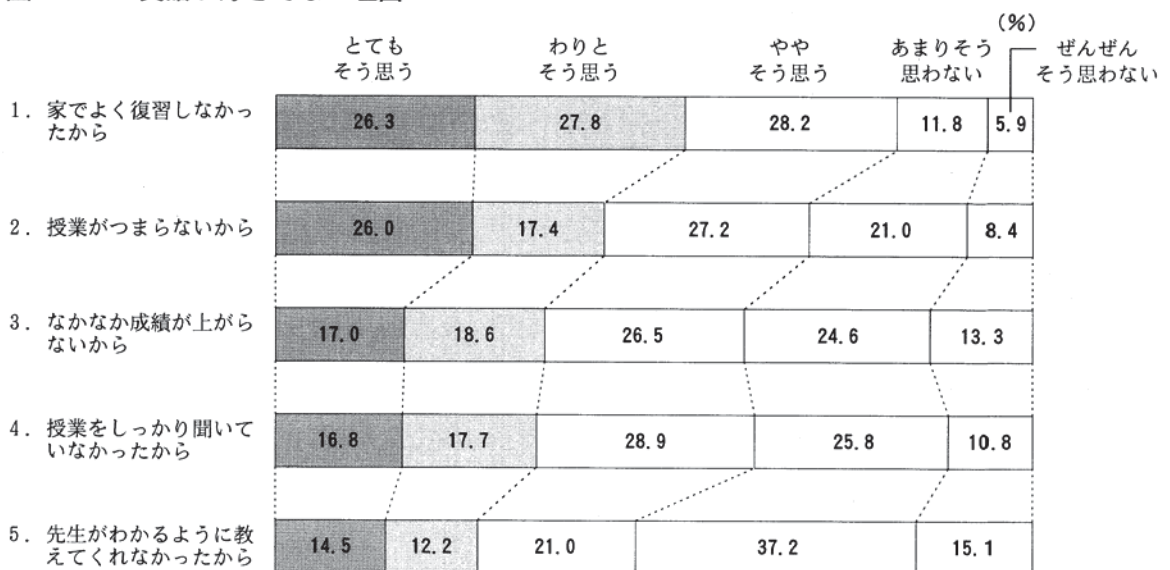


図3-3 英語が好きでない理由



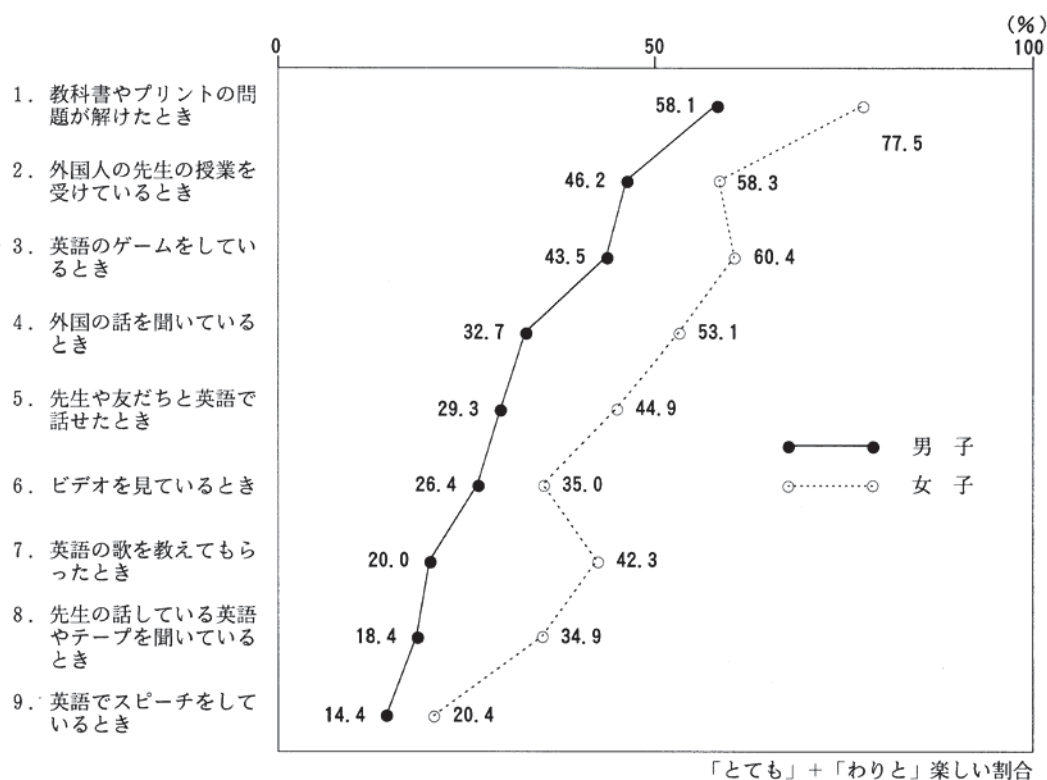
2. 英語の授業が楽しいとき

今度は、英語の授業を楽しんでいると感じるときをみていこう。

図3-4によると、男女とも「教科書やプリントの問題が解けたとき」が断然トップ

(全体で67.0%) にあがっている。これは表3-2の数学の成績別にみても、「教科書やプリントの問題が解けたとき」授業が楽しいが、成績の上下に関係なく高率を示している。

図3-4 英語の授業が楽しいとき × 性



困難を解決したときの喜びは、誰もが経験ずみのことだが、この「教科書やプリントの問題が解けたとき」というのも、その喜びに相通じるものがあり、うなずける結果である。しかし一方では、問題を解くことに重きがおかれている授業が多いということもいえるのではないだろうか。communicative language teaching の必要性が叫ばれているが、実際

に生徒中心の授業の実践がまだまだ足りないといえるのではないだろうか。リスニングやスピーキングのチャンスを存分に与えた授業の展開が、どこでも当然のようになされるようになったとき、生徒が楽しいと感じるときもおおのずと変わってくると思われる。いずれにしても、生徒の興味・関心をひく創造的な授業の組み立てへのたゆまぬ努力が、今こそ

表 3 - 2 英語の授業が楽しいとき × 数学の成績

(%)

	上	中の上	中	中の下	下
教科書やプリントの問題が解けたとき	60.2	74.2	69.6	66.7	54.1
外国人の先生の授業を受けているとき	69.5	56.7	52.6	49.3	36.0
英語のゲームをしているとき	56.5	55.7	44.6	44.7	44.4
先生の話している英語やテープを聞いているとき	37.1	32.9	23.6	24.9	17.1
外国の話を知っているとき	51.9	50.3	42.8	36.4	44.4
先生や友だちと英語で話せたとき	50.9	44.8	34.1	34.3	24.3
英語の歌を教えてもらったとき	32.7	33.1	29.4	31.8	23.8
ビデオを見ているとき	32.7	34.5	30.4	29.1	24.3
英語でスピーチをしているとき	34.3	21.9	15.7	12.8	10.1

「とても」+「わりと」楽しい割合
 ○ は最大値
 ⊖ は第2位

英語教師に要求されているといえよう。

後の図3-5によっても、生徒たちは英語を聞き取れるようになりたい、話せるようになりたいという願いが強いことがわかるが、その願いの実現に最も近い方法として、外国人の先生による授業を楽しみにしていることが表3-3から推察できる（「とても・わりと楽しい」が51.7%）。ネイティブスピー

カーの英語を直接耳にし、話しかけることができ、外国人教師を通して異文化に触れることができる授業は、生徒にとって楽しい授業にちがいない。同時に、多くの外国人教師が自身も受けてきた「生徒中心の授業」を展開できることも、生徒が授業が楽しいと感じる大きな要因といえる。

表3-3 英語の授業が楽しいとき

(%)

	とても 楽しい	わりと 楽しい	あまり 楽しくない	ぜんぜん 楽しくない	やった ことがない
教科書やプリントの問題が解けたとき	23.8	43.2	21.8	9.5	1.7
	67.0		31.3		
外国人の先生の授業を受けているとき	17.7	34.0	28.7	18.2	1.4
	51.7		46.9		
英語のゲームをしているとき	17.9	33.4	25.1	16.1	7.5
	51.3		41.2		
外国の話を聞いているとき	14.4	27.6	28.5	20.5	9.0
	42.0		49.0		
先生や友だちと英語で話せたとき	10.1	26.3	33.0	22.1	8.5
	36.4		55.1		
ビデオを見ているとき	9.5	20.8	24.2	11.3	34.2
	30.3		35.5		
英語の歌を教えてもらったとき	8.7	21.4	30.7	24.7	14.5
	30.1		55.4		
先生の話している英語やテープを聞いているとき	4.1	21.8	45.4	27.0	1.7
	25.9		72.4		
英語でスピーチをしているとき	5.1	12.2	35.9	25.9	20.9
	17.3		61.8		

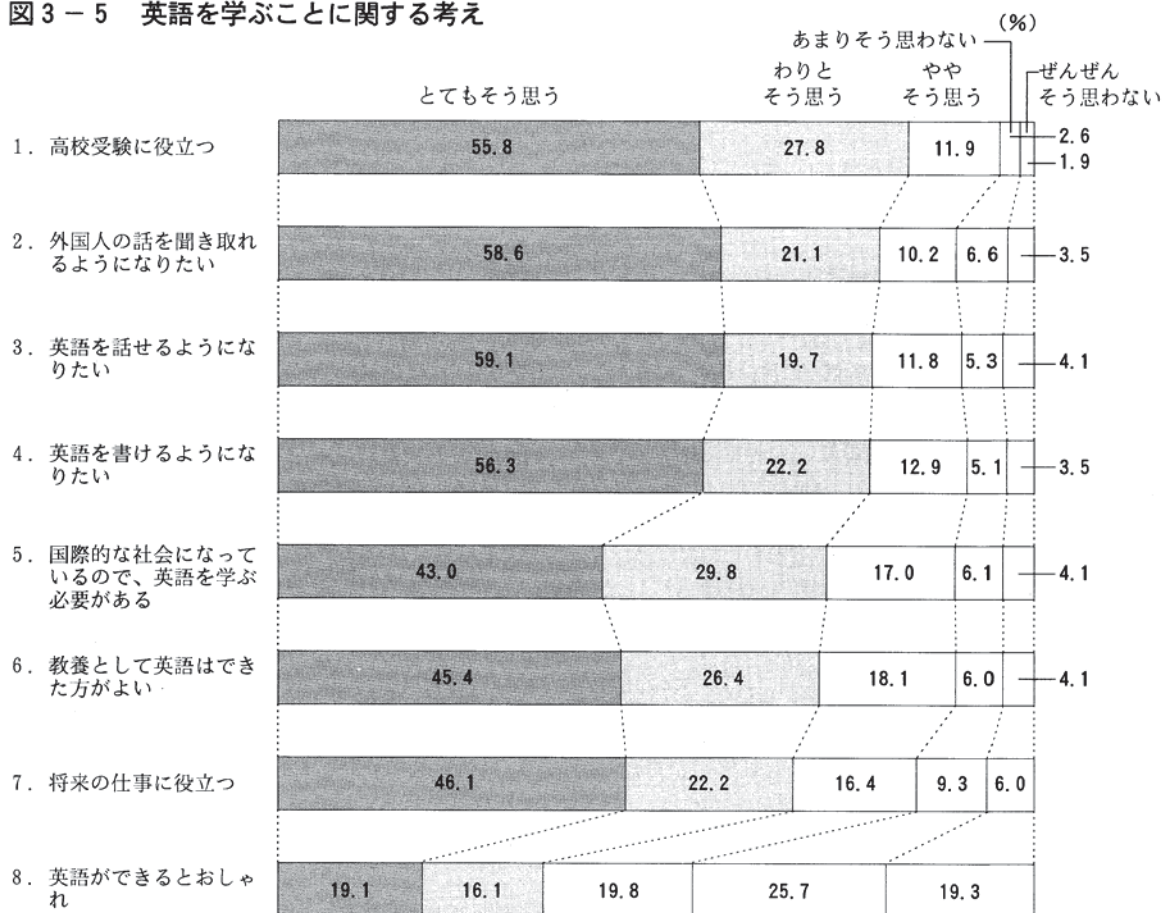
3. 英語を学ぶことに対してどのように思っているか

図3-5によると、英語を学ぶことに関して、まずは「高校受験に役立つ」と考えている生徒が一番多いことがわかる。「とてもそう思う」と「わりとそう思う」を合わせると83.6%にのぼる。英語を学ぶ目的が差し迫った高校受験のためとなるのも、今の受験をとりまく風潮をみると、当然の集計結果であるといえる。同時に生の英語を聞き、話し、書けるようになりたいという願いを持っている生徒はそれぞれ79.7%、78.8%、78.5%と80%に近い。つまり、およそ8割の生徒たちが英語を使いこなせるようになりたいという願いを持っている。図3-6によると、英語を自由に使いこなせるようになりたいと思って

いる生徒は、男子より女子の方が1割程度多い。また、生徒の72.8%が「国際的な社会になっているので、英語を学ぶ必要がある」（図3-5）と答えている。

では英語を学んだ結果、生徒たちはどう変わったと思っているのだろうか。表3-4をみてみよう。「先生の話している英語がわかるようになった」が65.8%、「英語が話せるようになった」が58.5%である。これは英語教育の成果であるともいえるが、80%近くの生徒たちがリスニング能力、スピーキング能力を高めたいと願っている数値からはほど遠い。また、2年生になると英語が嫌いになる生徒が43.5%もいる（図3-2）という現実

図3-5 英語を学ぶことに関する考え



も直視する必要がある。生徒のニーズに応えた授業展開がまだまだ足りない。と同時に、英語を聞いたり話したりできることはあまり評価されず、プリントや教科書の問題が多く解ける方が評価される現実につっかり、プリント類のできない生徒たちが英語への興味を失っていくのではないだろうか。入学試験問題にリスニング能力やスピーキング能力を試

す内容がもっと取り入れられるようになれば、生徒のニーズに応えた授業の展開がしやすくなることだろう。

また、「将来の仕事に役立つ」と答えた生徒は68.3%であり（図3-5）、これからは日本が国際的社会に深くかかわっていく時代であると、生徒たちが認識していることがうかがえる。

図3-6 英語を学ぶことに関する考え × 性

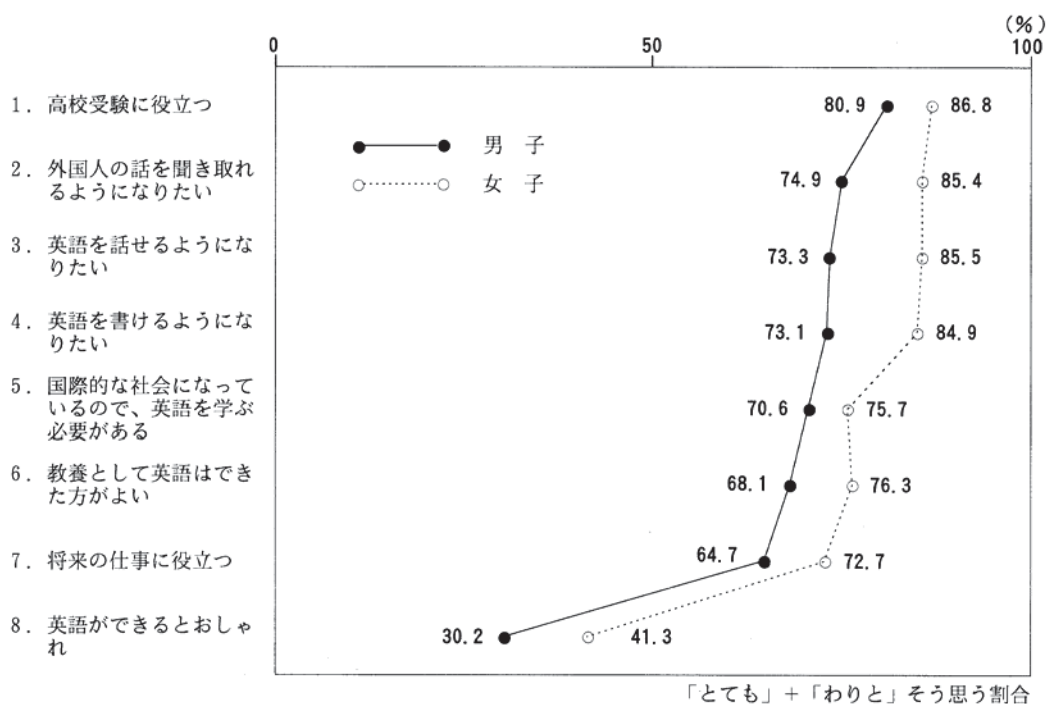


表3-4 英語を学んで変わったこと

	(%)				
	とても そう思う	わりと そう思う	やや そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
先生の話している英語がわかるようになった	10.6	20.5	34.7	21.4	12.8
	65.8			34.2	
英語が話せるようになった	6.9	17.1	34.5	28.2	13.3
	58.5			41.5	
映画やテレビ、ラジオの英語に興味を持つようになった	15.4	18.6	23.6	26.5	15.9
	57.6			42.4	
外国人の生活や考え方が以前よりわかるようになった	9.5	16.1	27.4	30.3	16.7
	53.0			47.0	

4. 塾と学校の英語

塾や家庭教師に英語を習っている生徒の割合を示しているのが、表3-5である。実に中学生の80%近い生徒が、学校を離れた場で英語を習っていることになる。男子と女子の差はさほど多くない。

それでは、塾と学校の英語の授業はどのように違うのだろうか。塾の方が「入試に役立つ」（「とても・わりと」76.0%）、「わかりやすく」（63.6%）、「質問しやすく」（61.2%）、「説明がていねい」（60.7%）と答えている（図3-7）。

一方、「英語を聞いたり話したりする機会」は、塾などではほとんどない（それぞれ28.9%、18.8%）。また「外国の話を聞く機会」もほとんどないといってよいだろう（9.1%）。

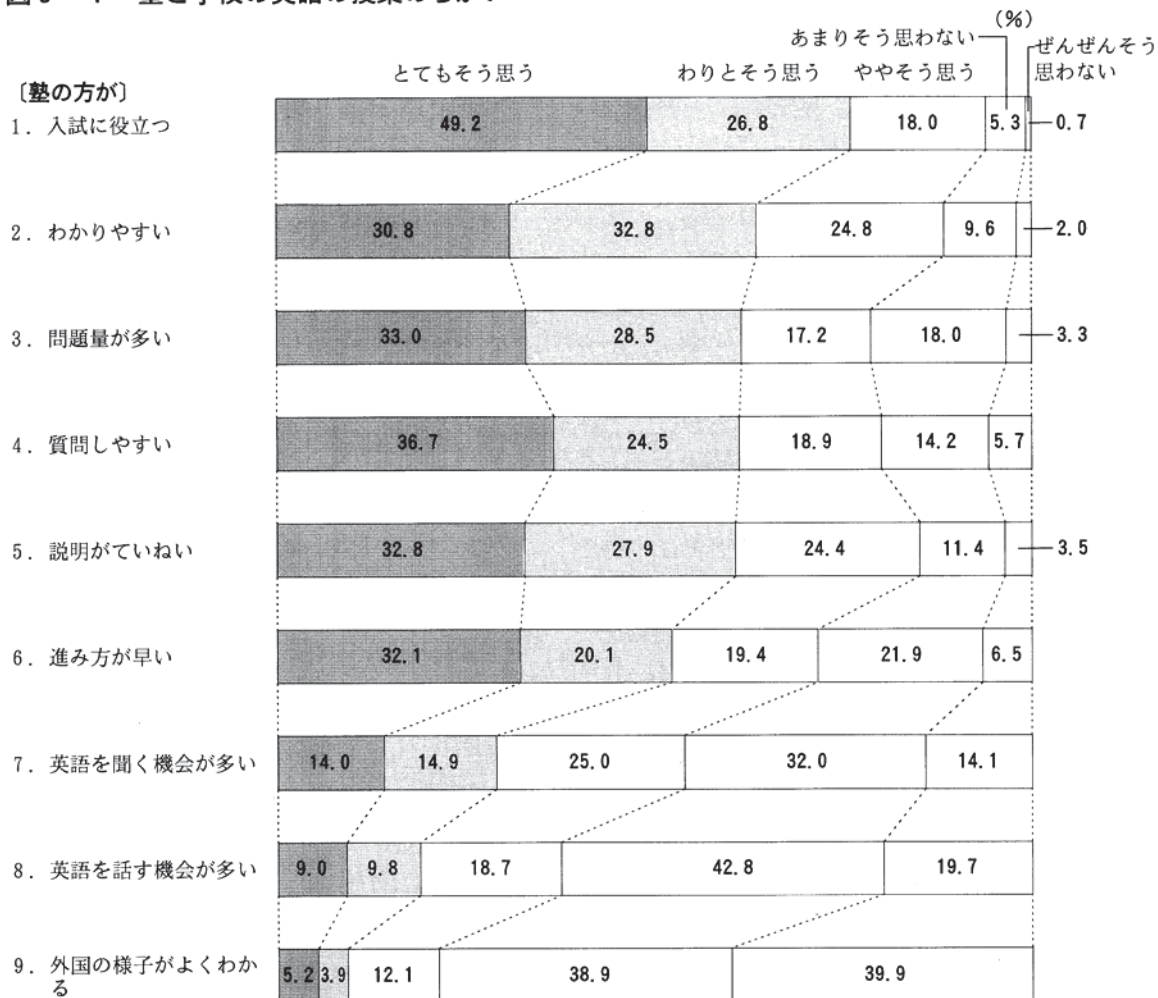
入試対策を中心に据えた塾が少人数制、能力別授業を実施し、入試に成果を上げている一方で、生徒たちの英語を聞いたり話したりできるようにになりたいという願望は、塾では満たされないということがいえる。

表3-5 塾の先生や家庭教師に習っているか

(%)

	習っている	習っていない
全 体	79.3	20.7
男 子	80.1	19.9
女 子	78.3	21.7

図 3-7 塾と学校の英語の授業のちがい



5. どんな英語の授業がいいか

では、学校の英語の授業はどんな授業がいいと思っているのだろうか。図3-8をみてみよう。「ゆっくり教えてほしい」と思っている生徒が半数以上（「とても・わりと」52.5%）いることがわかる。「外国人の英語の先生に教えてもらいたい」と思っている生徒（32.9%）が、これに続く。「能力別に分けて授業をしてほしい」という生徒も、比較的多い（32.4%）。

図3-9の数学の成績との関係を見てみよう。能力別授業に「とてもしてほしい」と、「わりとしてほしい」を合わせると、成績上

位者は39.3%、一方、下位者は37.0%がそう思っていることがわかる。それに対して中位者は29.3%であり、中位者の50.0%は「あまり・ぜんぜんしてほしくない」と答えている。上位者と下位者の多くが、能力別学級を希望し、自分のレベルにあった授業で力をつけたいと思っているのは、現実的で切実な要求といえる。また表3-6の進路希望別との関係を見ると、一流の4年制大学への進路希望者を除いては、「ゆっくり教えてほしい」が最大値となっている。これらの希望に学校がどう応えていくのかは、今後の課題といえよう。

図3-8 どんな英語の授業がいいか

	(%)				
	とても そう思う	わりと そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	ぜんぜんそう 思わない
1. ゆっくり教えてほしい	29.2	23.3	24.7	16.6	6.2
2. 外国人の英語の先生に 教えてもらいたい	17.2	15.7	21.7	29.4	16.0
3. 能力別に分けて授業を してほしい	18.6	13.8	20.4	27.6	19.6
4. 外国の話をもっとして ほしい	15.7	14.0	22.2	31.2	16.9
5. 英会話中心の授業が いい	12.6	13.1	20.2	40.0	14.1
6. 問題量を増やしてほ しい	8.3	9.1	19.3	40.7	22.6

図3-9 能力別授業の希望 × 数学の成績

(%)

	とても そう思う	わりと そう思う	やや そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
上	24.3	15.0	24.3	16.8	19.6
中の上	15.5	16.9	21.3	29.4	16.9
中	16.8	12.5	20.7	29.1	20.9
中の下	20.3	11.5	19.0	31.5	17.7
下	21.8	15.2	18.8	20.8	23.4

表3-6 どんな英語の授業がいいか × 希望進路

(%)

	中学卒で 就職	高校卒で 就職	短大・ 専門学校	まあまあの 4年制大学	一流の 4年制大学
ゆっくり教えてほしい	29.4	57.3	61.4	52.1	33.3
外国人の英語の先生に教えて もらいたい	16.7	22.7	30.3	36.4	48.3
能力別に分けて授業をしてほ しい	29.2	33.6	31.8	28.5	41.0
外国の話をもっとしてほしい	16.6	21.3	29.2	31.4	40.7
英会話中心の授業がいい	8.3	17.9	23.9	25.4	44.3
問題量を増やしてほしい	4.2	6.5	13.3	19.7	36.7

「とても」+「わりと」そう思う割合
○は最大値

第4章 社会科



社会科では、次の6項目について質問した。つまり、①社会科が好きか嫌いか、②いつごろからそうなったのか、③3分野（地理・歴史・公民）のうち、どの分野に親しみを感じているか、④社会科についてどんな考えを持っているか、⑤どんな授業が好きか、⑥どんな内容が好きか、の6項目である。個々の集計結果（男女別）は巻末の資料にある。

順序を追って「まとめ」と「分析」を記そう。

1. 好き嫌いの分かれ目は中1

社会科は、中学生から好かれているのか、嫌われているのか。全体的にみると、「とても・わりと・やや」好きが63.1%。男女別でみると、男子69.6%、女子56.2%であり、「まあ好き」ということになるのだろう（図4-1）。女子では「あまり好きでない」という回答が33.1%で最大値であり、「とても好き」は一桁台（8.0%）で最下位を示した。女子の社会科好きはいまいちというところだ

ろうか。つまり、図4-1に示す通り、嫌われてはいないにしても、決して歓迎されていないというのが現状であると思う。

そして、もう一つ気がかりな傾向を示すが、社会科を好きな程度と希望進路別にまとめた表4-1である。より早く社会に出ていく者たちほど、社会科は嫌いと答えている。社会科は単なる教養や大学受験に必要なだけの教科であってはならないし、社会人として

活動するときの基礎的知識の一分野を担当するものと考えれば、集計結果には社会科教師の側に考え直しを求めるものがあることを示

しているといえよう。

さて、社会科に対する好き嫌いの傾向がはっきりと出てくるのはいつごろなのである

図 4 - 1 社会科を好きな程度

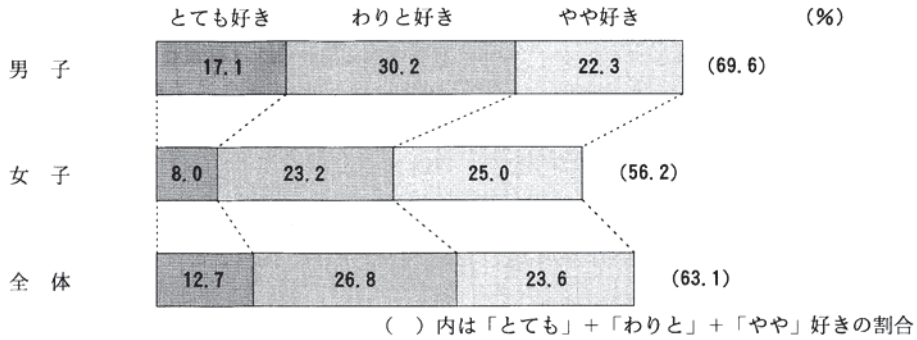


表 4 - 1 社会科を好きな程度 × 希望進路

	とても好き	わりと好き	やや好き	あまり好きでない	まったく好きでない	(%)
中学卒で就職	5.0	15.0	20.0	35.0	25.0	60.0
高校卒で就職	6.1	24.6	26.2	30.9	12.2	43.1
短大・専門学校	7.6	22.6	24.5	34.7	10.6	45.3
まあまあの4年制大学	17.6	27.3	24.4	26.0	4.7	44.9
一流の4年制大学	26.7	41.6	14.9	11.2	5.6	68.3
全体	12.7	26.8	23.7	28.1	8.7	

○ は最大値

うか。表4-2によれば、小学校高学年以降、中学1年が分かれ目である。学習指導要領では、中1～2は、地理と歴史の併学習（ π 型学習）が基本である。したがって中1で突然、小学校ではまったく学習したことがない世界地理の学習から始まる。ここをクリアできる生徒はそのまま「好き」になるのだろうが、そういかなかった生徒は、そのまま「嫌い」になってしまうのかもしれない。

表4-3は、「中学卒で就職」は好き嫌いのはっきりする時期が小学校時代に下るが、

「高校卒で就職」から「一流の4年制大学」への進路希望者はおしなべて中学1年に集中することを示している。中学校1年生という時期の指導のあり方、学習内容の選択、教材の選び方など、綿密な準備・計画が必要なようである。同時に学習指導要領の π 型も再考の必要があるのではないかと思う。1年で地理（それも日本地理から）、2年で歴史、そして3年で公民というように、学年を追っての学習——ザブトン型学習も見直すこともあってよいのではないだろうか。

表4-2 社会科の好き嫌いの傾向はいつごろから？ × 性

(%)

	小 学			中 学		
	1～2年	3～4年	5～6年	1年	2年	3年
男子	11.4	8.7	22.5	29.2	18.8	9.4
女子	7.5	6.0	20.4	33.1	18.2	14.8
全 体	9.5	7.3	21.5	31.2	18.5	12.0

○は最大値

表4-3 社会科の好き嫌いの傾向はいつごろから？ × 希望進路

(%)

	小 学			中 学		
	1～2年	3～4年	5～6年	1年	2年	3年
中学卒で就職	30.0	5.0	30.0	10.0	15.0	10.0
高校卒で就職	8.6	7.2	22.4	33.1	16.3	12.4
短大・専門学校	9.3	6.8	19.6	34.0	18.0	12.3
まあまあの4年制大学	7.9	7.7	21.5	28.1	21.9	12.9
一流の4年制大学	13.8	8.8	22.5	30.5	15.0	9.4
全 体	9.5	7.3	21.5	31.2	18.5	12.0

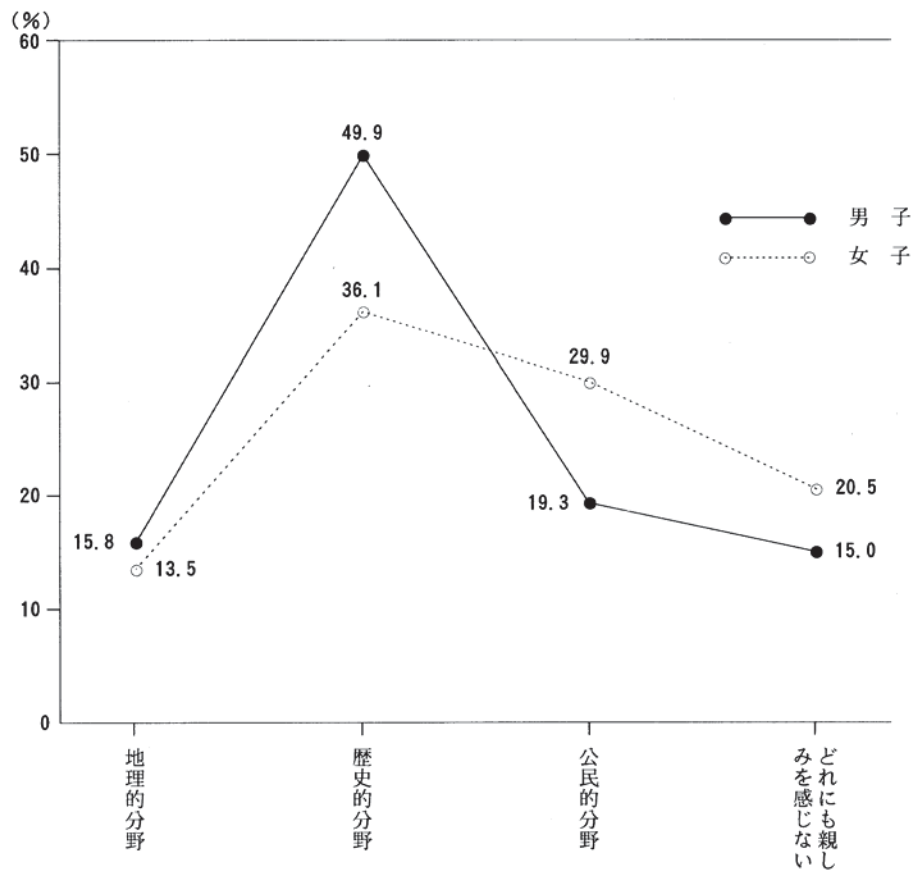
○は最大値

2. 好きな分野は「歴史的分野」

地理、歴史、公民の3分野の学習の中で、一番親しみが感じられているのは、歴史的分野である(図4-2)。比率に差が少々出て

いるものの、男女に傾向の違いはない。2人に1人は、「歴史」が好き(男子49.9%)と答えている。ところで、歴史好きは地理好き

図4-2 社会科のうちで親しみを感ずる分野 × 性



の約3倍、公民好きの2倍弱というのはなぜなのだろうか。以前の地理>歴史>公民という傾向は消えたようである。歴史的分野に親しみを感じている傾向は、マスメディアの影響——テレビ等の歴史を取り扱った人気番組など——も考察の中に入れてよいかもしれないが、地理的分野に関連する好番組も多いこ

とを考えると、そのまま結論づけるには説得力に欠けるといわざるを得ない。それよりも、中学校に入学したら突然習ったこともない世界地理から始まる社会科にとまどいを感じ、今はテレビなどを通じて視覚的にも入ってきやすくなった歴史ものに興味が集中し、そのまま学校の勉強でも「歴史が好き」になっ

表4-4 社会科のうちで親しみを感じる分野 × 希望進路

(%)

	地理的分野	歴史的分野	公民的分野	どれにも親しみを感じない
中学卒で就職	5.0	30.0	10.0	55.0
高校卒で就職	14.9	39.5	22.7	22.9
短大・専門学校	13.7	36.6	29.2	20.5
まあまあの4年制大学	14.4	49.5	23.7	12.4
一流の4年制大学	16.9	52.5	22.5	8.1
全 体	14.5	43.4	24.6	17.5

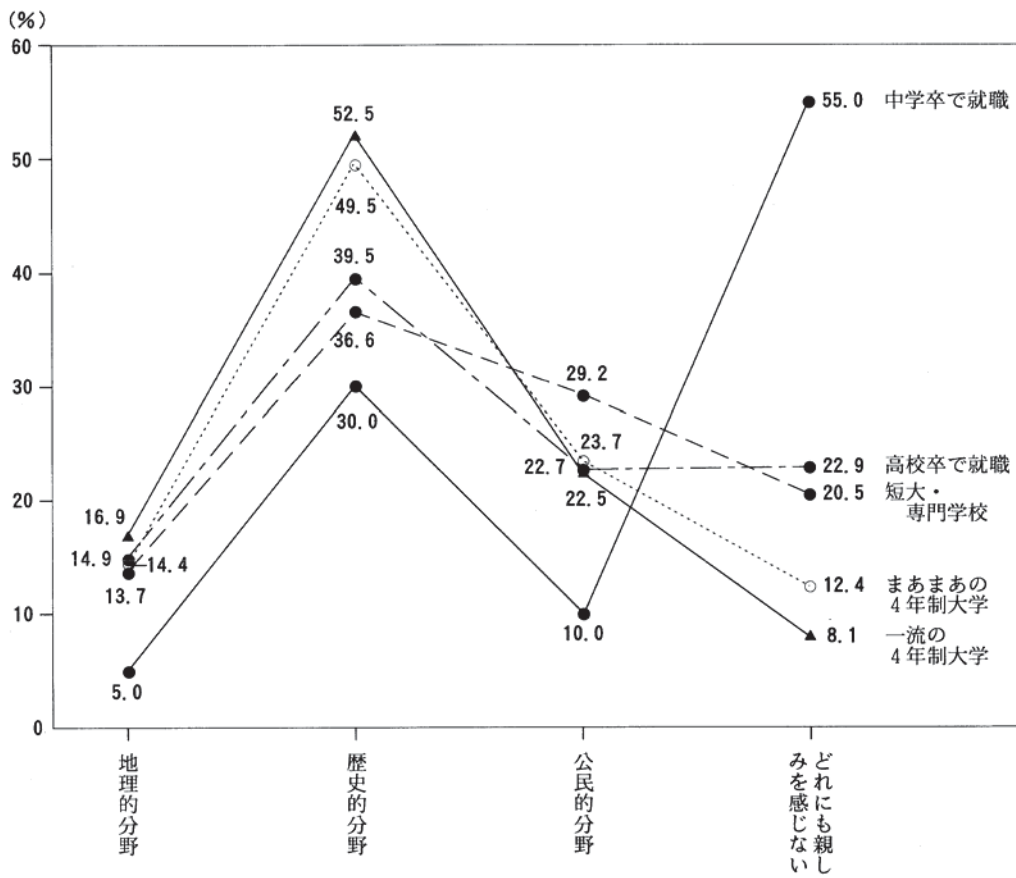
○は最大値

たのではないかと思う。

ここでの回答でも、希望の進路別の回答では「中学卒で就職」が気になる。「どれにも親しみを感しない」が55.0%と、半数を超えるのである（表4-4、図4-3）。「高校卒で就職」から「一流の4年制大学」とは違う傾向の回答をしているのが気になりである。

現在、中学卒で社会へ出る者の数は、極端に少数になった——1974年(昭和49年)で、すでに高校進学率は90%を超していた——とはいえ、55.0%が「どれにも親しみを感しない」ような授業が今も続いていると考えると憂慮せざるを得ない。

図4-3 社会科のうちで親しみを感する分野 × 希望進路



3. 中学生は社会科を大切に思っている

次に、生徒が社会科についてどんな考え方を
持っているのかについて報告する。

10項目の質問を設け、生徒の考えに近いもの
を、「とてもそう思う」から「ぜんぜんそう
思わない」までの5つの回答の中から選ん
でもらった。その中で、「とてもそう思う」
から「ややそう思う」までの3つの合計の比
率をまとめたものが、表4-5である。

質問項目の1-5は肯定的な考え方、6-
10は否定的な考え方で設定されている。例え
ば、「世の中に出てから知識として役立つ」

に「とてもそう思う」と答えれば、社会科に
意味を見いだしており、逆に「ぜんぜんそう
思わない」と答えれば、社会科の勉強なんて
無意味、と考えているわけである。しかし、
6-10では、否定的に設問が作られているか
ら、答えの意味は反対となる。もう一度、表
4-5をみてほしい。

社会科の勉強に意味を見いだしている生徒
の比率は、肯定的な考え方に立つもの（1-
5）は、最低の「旅行するときに役立つ」で
も74.6%、つまり4人のうち3人が「とても

表4-5 生徒の社会科についての考え方

		そう思う			小計
		とても	わりと	やや	
肯定的な考え方	1. 世の中に出てから知識として役立つ	26.6	34.9	24.4	85.9
	2. ものの見方、考え方がしっ かりする	14.6	27.1	33.7	75.4
	3. 新聞を読んだり、テレビを 見たりするとき、基礎知識 となる	35.3	38.8	19.3	93.4
	4. 国際社会に生きていくため に必要な知識だと思う	32.0	34.0	22.5	88.5
	5. 旅行するときに役立つ	16.2	27.2	31.2	74.6
否定的な考え方	6. 学習内容が多すぎて、頭の 中が混乱してしまう	22.3	25.0	27.9	75.2
	7. 高校入試の受験科目でなけ れば楽しい教科である	17.7	18.6	20.8	57.1
	8. 高校や大学の受験以外には 役に立たない	4.3	5.2	13.4	22.9
	9. 暗記ものの教科だと思う	41.9	27.2	19.5	88.6
	10. 他の教科より気楽な気持ち で授業が受けられる	14.6	18.7	21.9	55.2

そう思う」から「ややそう思う」と答えている。特に「新聞を読んだり、テレビを見たりするとき、基礎知識となる」(93.4%)は、「国際社会に生きていくために必要な知識だと思う」(88.5%)、「世の中に出てから知識として役立つ」(85.9%)とともに非常に高い比率を示し、中学生の考え方が健全であることの指標ととらえてよいだろう。

さらに、やや細かくみると、「旅行するとき役立つ」であるが、全体的に「役立つ」と考える中学生の比率は低いだけでなく、「とても」は16.2%と10%台にとどまる。中学生の回答は地理的分野を頭に浮かべて答えたのであろうが、実利的というか、「すぐに役立つ」ような知識は2番目なのであろう。第一に考えていることは、基礎知識の習得にあるようだ。「否定的な考え方」を聞いた質問に関する回答では、「高校や大学の受験以外には役に立たない」(「とても」4.3%、「わりと」5.2%、「やや」13.4%、計22.9%)が印象的である。

中学生は、社会科を受験以外には役立つなどとは考えていない。「暗記ものの教科だと思う」(41.9%、27.2%、19.5%、計

88.6%)と「学習内容が多すぎて、頭の中が混乱してしまう」(22.3%、25.0%、27.9%、計75.2%)という回答は、教える側として十分に検討しなければならない数字ではないか。

生徒たちが、社会科を大事に考えているだけに、「暗記物」「頭の中が混乱してしまうもの」と受け止めさせてしまっている教え方を続けている教師がまだまだ多いのではないかと心配してしまう。そして、そのような指導のあり方が「ものの見方、考え方がしっかりする(「とても」14.6%)」の比率が伸びないことと結びつくのではないか。本来、社会科は、「ものの見方、考え方」を伸ばすための教科であることは、学習指導要領の各分野の目標にも、「地理的事象を多面的に考察し公正に判断する能力と態度を育てる」「歴史的事象を多角的に考察し公正に判断する能力と態度を育てる」「様々な角度から考察し、事実を正確にとらえ、公正に判断する能力と態度を育てる」と、重ね重ね強調しているのだから、社会科教師としては、生徒の考え方を180度転換させるような努力を試みなければならないのではないかとと思う。

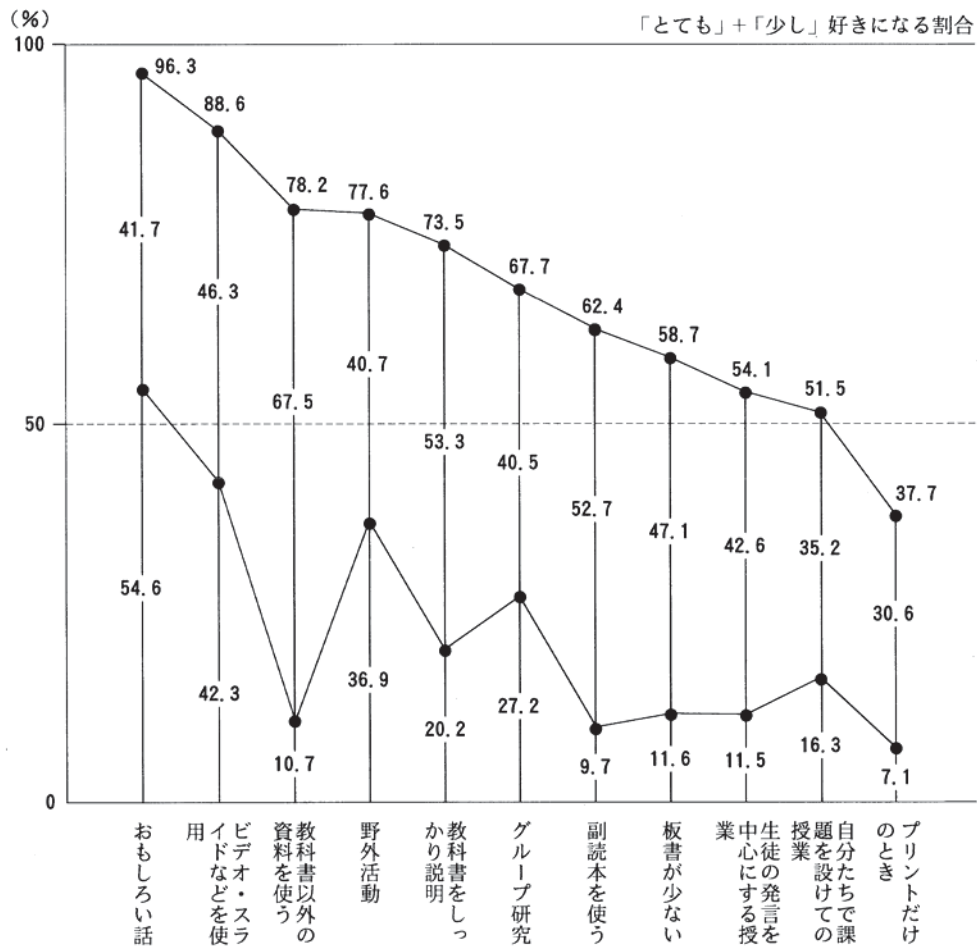
4. 教師は生徒の要望に応じた授業を

教師が指導方法の改善に努力して、生徒が喜んで参加するような社会科にするには、どんな点に考察の眼を向けなければならないのか。この点は、次の「どんな授業のときに社

会科が好きになるか」に対する生徒の回答から引き出してみたい。

図4-4は、生徒の回答（「とても好きになる」と「少し好きになる」の合計）を高比

図4-4 どんな授業のとき、社会科が好きになるか？



率順に並べたものである。「年中、そんなことばかりやっておられるものではない」とお叱りを受けそうだが、社会科の授業は、少しうっかりすると“講義式”ばかりに陥ってしまうのではあるまいか。生徒の反応に耳を傾けてみよう。

授業は、何よりもおもしろくなくてはならないということだ（「おもしろい話」96.3%）。生徒にとって「おもしろい」ことは絶対条件である。そして、それは目と耳から入ってくるものである（「ビデオ・スライドなどを使用」88.6%）。教師の話の上手、下手も重要な要素だろうが、生徒は教師の雑談や脱線だけを求めているわけではない。教師が視聴覚教材を用い、教科書以外にも資料——わかりやすいものでなければならぬ——を準備し、教科書の内容をしっかりと説明してくれることを希望している。ときには教室を出て校庭の緑陰で授業をしたり、校外に出て、生徒自身の目と耳で、さらには五感全部を動員して社会事象を確認するような授業を立案することが大切なのだと思う。副読本も買わせるだけ、プリントも作って渡しておくだけでは不十分のようである。「副読本を使う」「プリントだけのとき」の「とても好きになる」の比率が、それぞれ9.7%、7.1%と、ともに一桁台というのは、この辺の事情を物語っているのではあるまいか。「教科書以外の資料を使う」（10.7%）も、同様に受け止めてよいだろう。

「生徒の発言が中心になってすすめられる授業」（54.1%）、「自分たちで課題を設けての授業」（51.5%）も、生徒からはあまり歓迎されていないようだ。教師は、この状態をどう受け止めたらよいのか。この種の授業は、生徒一人一人が、また生徒のグループが相当能力を養ってきていて、積極的、能動的に行動できるようになっていなければ成立しない種類の授業であることを前もって考えておくべきだろう。そして、この種の授業は教師としては公民的分野（第3学年）で展開したいのだろうが、「板書が少ない」ことを心配する生徒（11.6%+47.1%=58.7%）もまだま

だ多い点を見ると、中学生はいろいろな事情から、この種の高度な授業展開をこなしていけるほど成長していないと判断してよいのではあるまいか。教師がこの点に気づかず、生徒の発言を期待し、課題を与えていっても、現状では生徒に負担を与えるだけで授業効果は期待できないだろう。残念ながら、生徒の積極性、能動性に期待する授業は非常に困難といえるのではないか。つまり中学生の学習能力は、一步手前であって、教師の指導によりかかっているレベルにあるのではあるまいか。

次に、「社会科のどんな学習内容が好きか」に移ろう。回答によって傾向をみると、1から11の設問のうち、最初の4問が地理的分野、続いて次の3問が歴史的分野、最後の4問が公民的分野に関連する（表4-6）。ここでも前述した「社会科のうちで親しみを感じている分野」での回答と同じように、歴史的分野の学習に対する関心度が、非常に高いことがわかる。続いて、関心を持つのは公民的分野。筆者などが考えると、一番わかりやすいだろうと思う地理的分野に示す関心度は低いのである。

以前は書物を何冊も読みこなし、年表なども自分で作りながら一つ一つ理解していかなければならなかった歴史学習が、テレビやマンガで視覚的、聴覚的に理解できるようになり、加えて各地で史跡が公開されたり、博物館や郷土資料館などもあちらこちらに建設されるようになって、歴史は生徒たちに身近になったのではないと思われる。もっともそれが、地理的分野での学習内容が著しく複雑化し、変化し、流動することで、中学生の把握能力を超えるものになってきたようにも思える。歴史的分野での学習内容は、地理的分野での学習内容よりも、あまり変化するものではないと、中学生は感じているのではないか。

以上、中学生の回答を軸に調査結果の報告と分析を記してみたが、中学生は筆者が事前

で好感をを寄せていてくれた。回答からは、「もっとわかりやすく教えてほしい。おとなになったとき、非常に役に立つ教科なのだから……」という声が、聞こえてくるようである。一方、教師の側が生徒の現状を十分に把握しきれずにいて、一生懸命に指導しながらも、それが空回りし、自分が期待する成果を

手に入れていない様子が、この調査の生徒の反応の中から連想できたと思う。

社会科教師が互いに横の連絡をとりながら、連帯を深めつつ、目の前の生徒の現状や実態にあった指導法を創出されていくことを望んでやまない。

表 4 - 6 社会科の好きな学習内容

(%)

		好 き		小 計
		ととも	少し	
地 理	1. 地図を見たり書いたりする	12.5	33.2	⑤ 45.7
	2. 身近な地域を調べる	9.6	33.7	⑦ 43.3
	3. 世界の地域や産物について	9.2	29.8	⑩ 39.0
	4. 気候や風土について	8.1	29.2	⑪ 37.3
歴 史	5. 歴史上の人物	① 30.6	② 38.9	① 69.5
	6. 年表を見たり書いたりする	③ 15.3	31.0	④ 46.3
	7. 史跡や博物館を見学する	② 29.3	① 39.8	② 69.1
公 民	8. 政治のしくみ	11.2	32.6	⑥ 43.8
	9. 法律を調べる	11.0	30.2	⑨ 41.2
	10. 商店や貨幣の流れを考える	9.9	32.9	⑧ 42.8
	11. 国際問題を考える	14.6	③ 34.2	③ 48.8

○は「好き」が50%を越すもの
○内の数字は比率の順位

第5章 理科



理科では、次の6項目について質問した。①理科が好きか嫌いか、②いつごろから嫌いになったか、③教科としての理科についてどんな考えを持っているか、④どんな理科授業が好きか、⑤理科の授業中どんな気持ちになるか、⑥理科授業の学習効果がどの程度あったか、である。個々の集計結果（男女別）は巻末の資料にある。順を追って、調査結果の「まとめ」と「分析」をしていこう。

1. 理科嫌いは中学1年から始まる

図5-1は、男女別の「理科の好き嫌い」の結果である。男子では、小学校時代には、「とても好き」と「わりと好き」を加えると約50%になる。半数の生徒たちは理科が好きだったことになり、「やや好き」を含めると約70%にのぼっている。女子は「とても好き」と「わりと好き」を加えて約40%で、男子より落ちるものの「やや好き」を加えると約65%になり、嫌われている教科ではないと

考えられる。

ところが中学1年になると、男子では「とても好き」だけで13.4%になる。小学校時代には「とても好き」が21.6%もいたわけであるから、理科好きの生徒の数は激減したといってもよいようである。「とても好き」「わりと好き」「やや好き」を加えると、小学校時代の数値とそう変わらないものになってしまうが、生徒たちが目をぎらぎらさせ、熱い

まなざしで学習する教科ではなくなってしまったように思う。

女子にも男子と同じような傾向がみられる。13.7%の「とても好き」が8.8%に減っている。「とても好き」「わりと好き」「やや好き」を加えても、約60%である。中学入学後は、そう大きな変動はみられないものの、女子は学年を追うにしたがって、徐々にではあるが、理科嫌いが進んでいるようである。

以上をまとめると、「理科」が好きか嫌いかなる分かれ目は、中学入学後にあるとあってよいようである。この調査結果は、今回の調査で明らかになったものではなく、何回かの過去の調査でも発表されており、目新しいことではない。小学校の理科では、自然の事物現象について疑問に思ったことを、具体的に実験・観察を通して問題解決的な学習方法を取り、直接理解していくことが多い。しかし、中学校の理科学習では、直接経験を

重視する指導が叫ばれながらも、まだ講義形式の授業がなされている傾向がある。したがって、実験・観察から理解するのではなく、抽象的な理解をしなければならなくなってしまふ。つまり生徒たちにとっては、理科の授業内容はわかりにくく、つまらないものとなってしまうのであろう。ただ試験の時に必要な知識を暗記する科目と受けとっているのかもしれない。

今回の学習指導要領の改定では、理科の週時数が減った。それは学習内容がむずかしく、また、学習内容が多すぎるといった理由からであった。確かに時数の減った分、教科書も薄くなり、内容も少なくなった。しかし、時数が少なくなったために、深化した学習指導がやりにくくなり、深まりのない浅い学習に終わってしまう。理科好きの生徒たちにとっては、物足りなさを感じてしまうところかもしれない。

図5-1 理科の好き嫌い × 性

		(%)				
		とても好き	わりと好き	やや好き	あまり好きでない	まったく好きでない
(1) 男子	小学校	21.6	28.2	20.3	17.8	12.1
	中学1年	13.4	29.7	28.4	19.6	8.9
	中学2年	12.0	29.5	27.5	20.4	10.6
	現在	12.2	31.3	25.5	21.9	9.1
(2) 女子	小学校	13.7	27.7	23.3	25.7	9.6
	中学1年	8.8	23.6	28.3	30.3	9.0
	中学2年	5.8	20.7	25.4	36.3	11.8
	現在	5.0	19.7	24.0	39.9	11.4

2. 理科は実験・観察があるから楽しい

それでは、生徒たちは理科に対してどのような考え方をもっているのだろうか。表5-1をみてほしい。「世の中に出てから知識として役立つ」「ものの見方、考え方がしっかりする」「新聞を読んだり、テレビのニュースを見るとき基礎知識となる」「国際社会に生きていくために必要な知識だと思う」「家庭生活に役立つ」の質問項目のいずれについても、「とてもそう思う」と回答しているのは、5%前後にすぎない。「わりとそう思う」を含めても15%前後である。理科を学習するということは、将来、社会人として主体的に生きていくうえでの必要な基礎科目で

あるという考えを、生徒たちはそう強くは持っていないようである。理科は「実験や観察があるので楽しい教科である」と、生徒たちは素直に考えているのだろう。また、「学習内容が多すぎて、頭の中が混乱してしまう」と回答している生徒が多いことも問題である。実験や観察を通した学習内容であれば、それなりのインパクトをもって学習効果が期待できるが、直接的な経験のともなわない学習では、ただ結果としての知識を覚えるだけになってしまうから、その知識量で頭の中で混乱が起こるのもしかたのないことかもしれない。

表5-1 理科に対する生徒の考え方

		そう思う			小計
		とても	わりと	やや	
肯定的な考え方	1. 世の中に出てから知識として役立つ	4.9	12.6	26.8	44.3
	2. ものの見方、考え方がしっかりする	4.4	11.1	32.9	48.4
	3. 新聞を読んだり、テレビのニュースを見るとき基礎知識となる	5.9	15.9	32.8	54.6
	4. 国際社会に生きていくために必要な知識だと思う	3.2	5.3	23.0	31.5
	5. 家庭生活に役立つ	4.2	10.4	29.6	44.2
	6. 実験や観察があるので楽しい教科である	20.6	28.3	26.7	75.6
否定的な考え方	7. 他の教科よりも気楽な気持ちで授業が受けられる	8.6	17.8	24.4	50.8
	8. 高校や大学の受験以外には役に立たない	9.7	13.6	24.3	47.6
	9. 高校入試の受験科目でなければ楽しい教科である	12.8	15.8	21.9	50.5
	10. 学習内容が多すぎて、頭の中が混乱してしまう	22.2	19.3	30.6	72.1

○は最大値

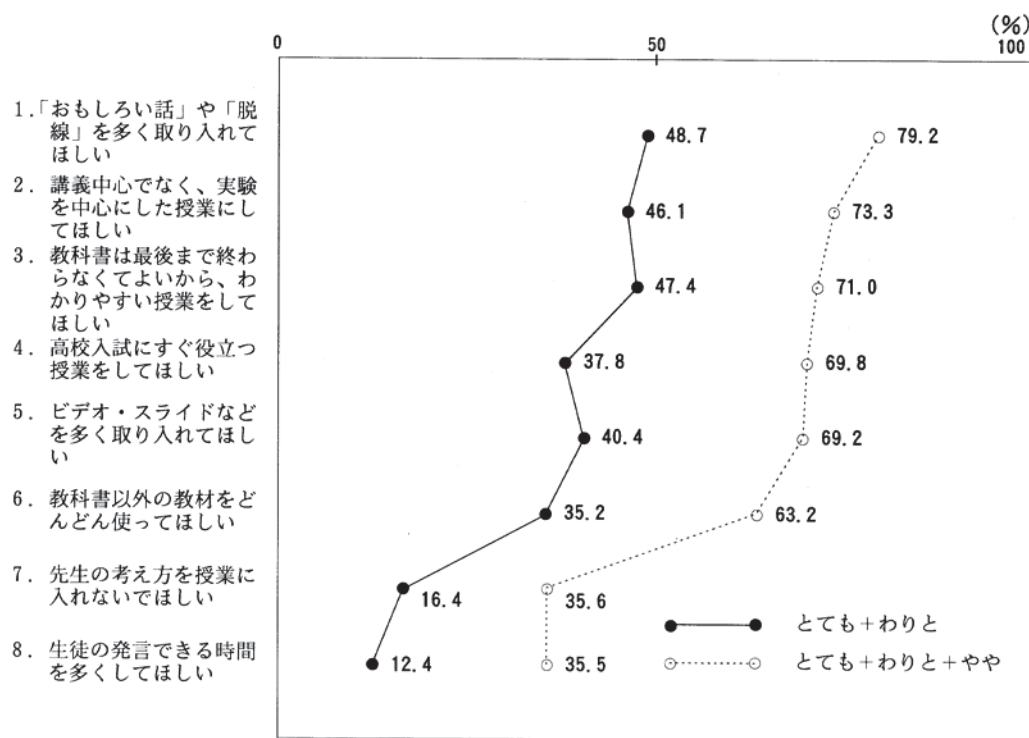
3. 生徒の望む理科授業

中学生の望んでいるよい理科授業とは一体どんなものなのだろうか。図5-2をみてほしい。『『おもしろい話』や『脱線』を多く取り入れてほしい』と回答している生徒の数が一番多い。しかしその反面、「先生の考え方を授業に入れないでほしい」と思っている生徒は思ったほど多くはない。この2つのことを考えてみると、生徒たちは学習内容そのものよりもむしろ、教師の人柄や考え方にふれたいと思っているのではないか。あるいはその時々々の社会情勢について教師はどう考えているのかといったことに興味や関心があるようにもとれる。授業の内容とは離れて、「スペースシャトルの中での重力はどうなるか」「メダカとイモリの生活する温度のちがい」

「木星に衝突するすい星」などについて話し始めると、生徒たちは身をのり出しながら聞き入ることがある。そのような状況を生徒たちは望んでいるのだろう。

「講義中心でなく、実験を中心にした授業」「ビデオ・スライドなどを多く取り入れた授業」を望んでいる反面、「生徒の発言できる時間を多くする」ことは望んでいない。理科学習の基本は、自然の事物現象を調べていくとき、仮説を立て、それを検証するための実験・観察をすることにある。その際、互いに考えを出し合うことが必要になるが、それを否定的に考えるのは問題である。主体的に学習していこうというのではなく、受け身の学習スタイルが身につけてしまったのだろうか。

図5-2 生徒の考えるよい理科授業のあり方

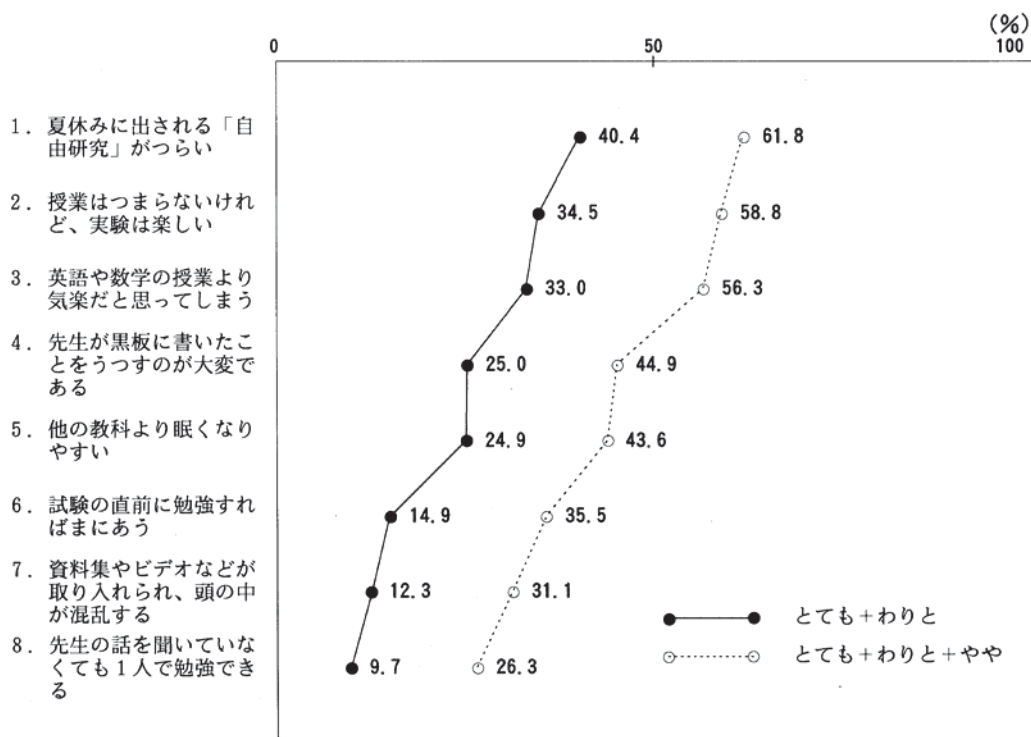


4. 授業中の様子

生徒たちは、理科の授業中どのようなことを考えているのだろうか。図5-3をみてほしい。ここの結果からは、特に著しい傾向は出ていない。強いてあげれば、「夏休みに出される『自由研究』がづらい」と回答している生徒の数が比較的多いことと、「先生の話聞いていなくても1人で勉強できる」と思っている者が少ないということである。理

科は、英語や数学とちがって、塾で学習する機会は少ないと考えられる。したがって、頼りになるのは学校の教師ということなのだろう。また、「試験の直前に勉強すればまにあう」教科ではないことも承知しているようである。そこまでわかっていたら、なぜもっと積極的に学習しようとししないのかと言いたいところである。

図5-3 理科の授業中の様子



5. 理科の学習効果

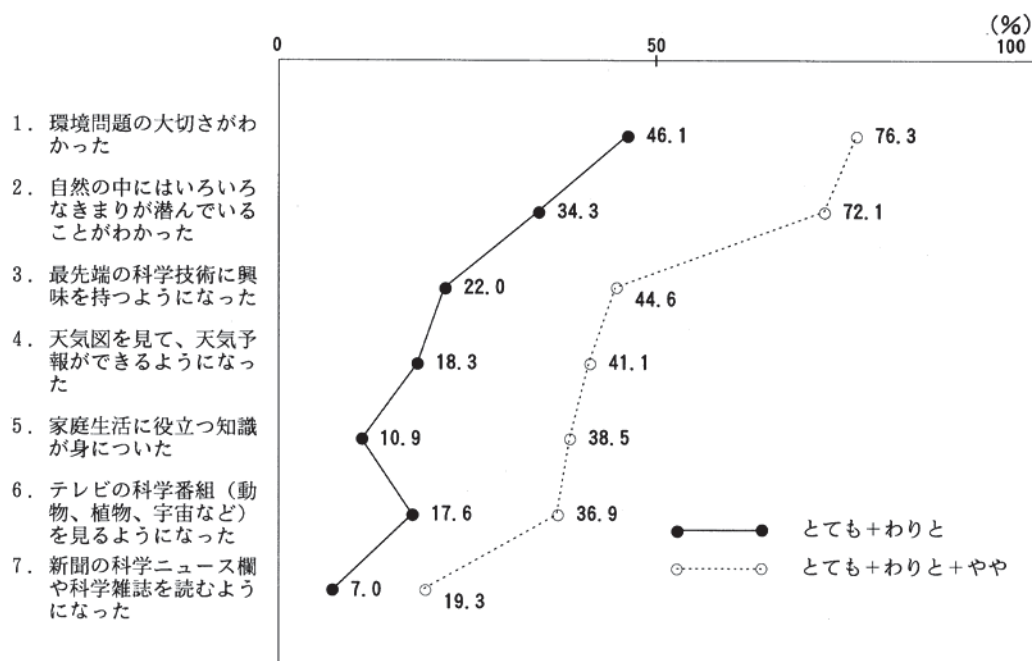
理科の学習効果についてみてみよう。図5-4をみてほしい。「環境問題の大切さがわかった」(「とても・わりと・やや」76.3%)、「自然の中にはいろいろなきまりが潜んでいることがわかった」(72.1%)が比較的高い比率を示している。環境問題については、大気汚染、水質汚染等から起こる公害問題など、社会生活をしていくうえで身近な問題であるから関心を示して当然といってよいだろう。むしろ、70%台では低い興味関心の示し方といったほうがよいくらいかもしれない。

「最先端の科学技術に興味を持つようになった」(44.6%)、「天気図を見て、天気予報ができるようになった」(41.1%)、「家庭生活に役立つ知識が身についた」(38.5%)、「テレビの科学番組(動物、植物、宇宙など)を見るようになった」(36.9%)、「新聞の科学ニュース欄や科学雑誌を読むようになった」(19.3%)など、もっと学習効果を感じてもよいのではないかと思える調査結果であった。

もっとも前述したように、授業時数の削減の影響か、入試を意識するあまり、とにかく教科書を終了させてしまおうといった強引な授業の進め方などもあることから、生徒たちに高い学習効果を期待することそのものが無理なことなのかもしれない。しかし、理科教師の立場からすれば、最先端の科学技術には興味関心を持ってほしいと思うし、テレビや新聞などの天気図を見ながら、自分が生活している地域の天気がどのように移り変わっていくのかなどについて、正確な予報はできな

「最先端の科学技術に興味を持つようになった」(44.6%)、「天気図を見て、天気予報ができるようになった」(41.1%)、「家庭生活に役立つ知識が身についた」(38.5%)、「テレビの科学番組(動物、植物、宇宙など)を見るようになった」(36.9%)、「新聞の科学ニュース欄や科学雑誌を読むようになった」(19.3%)など、もっと学習効果を感じてもよいのではないかと思える調査結果であった。

図5-4 理科の学習効果



いまでも、おおよそどのようになるかぐらいは考えてほしい。また、「電気」の学習で得る知識は、家庭生活の中で十分に役立つ内容である。もちろん電気だけでなく、さまざまな学習内容が、家庭生活の中での基礎的なものとして役立つはずである。

しかし、こうした考えは、主体的に学習し

ていこうという意識のない生徒たちに対して過大な学習効果を期待しすぎているのだろうか。単なる知識を覚えればよいという理科授業ではなく、生活の中で生きた知識となるような学習指導の方法そのものを、理科教師は考えなければならない状況に追い込まれているといえそうだ。

6. 理数離れをめぐって

最近、大学の理工学部では受験者数が減ってきているという。数が少なくなれば、優秀な人材が集まってこないことにつながりかねない。

今回の調査でも、その一端が中学生のレベルでうかがえる。表5-2をみてほしい。数学の成績と一番得意な教科のクロス集計の結果である。数学の成績が上位の者は、一番得意な教科に数学以外では英語をあげている。

また表5-3は、数学の成績と将来一番役に立つ教科のクロス集計の結果であるが、数学の成績とは無関係に圧倒的といっていらい英語を選んでいる。しかも数学の成績が

よい者ほど、その傾向は強い。次に表5-4をみてほしい。これは、数学の成績と理科の成績のクロス集計の結果である。一番高い数値で約60%、あとは50%前後である。相関が高いというよりはむしろ、相関があるといった程度である。数学の成績と英語の成績のクロス集計の結果を調べれば、かなりの高さを示すことは明らかである。

以上のことから考えると、理数系といった概念は、ごく一部の生徒たちにはあてはまるのだろうか、今や一般的な意味では使えなくなってしまった言葉といってもよさそうである。むしろ中学生には、英数系といった言葉

表5-2 数学の成績 × 一番得意な教科

		(%)									
		国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	技術・家庭	保健体育	
数学の成績	上	0.9	5.6	41.8	8.3	18.5	15.7	3.7	0.9	4.6	
	中の上	10.4	8.1	25.5	10.1	17.4	7.7	5.4	2.3	13.1	
	中	9.7	16.2	7.8	7.6	13.4	9.5	11.0	4.5	20.3	
	中の下	14.0	13.0	2.7	6.3	10.3	10.0	14.0	9.7	20.0	
	下	10.0	15.3	1.1	3.7	4.2	11.6	17.4	10.0	26.7	

が似合いそうである。これはとりもなおさず、
中学校の学習が受験体制にどっぷりつかって
いることを意味することにつながるのだろう。

英語と数学は学校だけではなく、塾や家庭学
習においても力を入れるのだから当然の結果
である。

表 5 - 3 数学の成績 × 将来一番役に立つ教科

(%)

		国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	技術・ 家庭	保体 体育
数学 の 成 績	上	13.9	10.2	10.2	3.7	44.4	3.7	0.0	9.3	4.6
	中の上	13.1	10.1	8.7	3.4	42.9	3.0	1.3	13.1	4.4
	中	16.2	9.0	10.9	1.1	39.7	1.1	1.7	14.7	5.6
	中の下	16.4	10.9	8.9	1.6	35.2	3.0	4.9	14.8	4.3
	下	20.0	10.8	12.8	1.0	19.5	4.1	8.2	18.5	5.1

表 5 - 4 数学の成績 × 理科の成績

(%)

		理科の成績				
		上	中の上	中	中の下	下
数学 の 成 績	上	53.3	26.2	15.9	3.7	0.9
	中の上	8.6	53.5	29.6	7.3	1.0
	中	2.8	18.9	60.1	16.7	1.5
	中の下	1.0	8.1	36.2	48.2	6.5
	下	0.5	6.0	11.9	30.8	50.8

7. まとめに代えて

今回の調査で明らかになったことは、理科嫌いの生徒が、少しずつではあるが、増え続けているのではないかということである。そして、せっかく学習した知識を十分に生活の中に生かしきれていない面を感じる。よい高校に入るためには、数学と英語に時間をかけ、その他の教科は適当にあつまっているという姿をみせつけられているようである。その結果、制度的にも軽いあつかいを受けている理科等の教科にしわよせがきているのかもしれない。

ない。

表5-5は、理科の好き嫌いとは希望進路とのクロス集計であるが、理科好きの生徒は「4年制の大学」に進学を希望している割合が高い。この結果をみるかぎり、理科好きの生徒は学習意欲が高いようである。したがって、そうした生徒たちのためにも、私たち中学校の理科教師は、「楽しくよくわかる」理科授業を創造していかなければならない。

表5-5 理科の好き嫌い × 希望進路

(%)

	中学卒で 就職	高校卒で 就職	短大・ 専門学校	まあまあの 4年制大学	一流の 4年制大学
とても好き	16.7	4.1	5.8	10.9	16.8
				27.7	
わりと好き	0.0	19.6	22.1	29.8	39.4
				69.2	
やや好き	25.0	29.1	24.5	25.4	15.7
				41.1	
あまり好きでない	33.3	35.4	36.3	27.6	16.2
				43.8	
まったく好きでない	25.0	11.8	11.3	6.3	11.9
				18.2	